月刊くまがわ春秋 第47号 2020年2月9日発行
企画：人吉球磨総合研究会 発行：人吉中央出版社
〒868-0015 熊本県人吉市下城本町1436-4の3号 TEL 0966-23-3759／FAX 0966-23-3759
http://www.hitoyoshi.co.jp/ info@hitoyoshi.co.jp

令和元年、人吉球磨唯一の
オフィシャルブランド開始。



HITOYOSHI KUMA

人吉・球磨
風水・祈りの浄化町

www.hitoyoshifusui.com

定価550円 本体500円

雑誌 81779−02-0

4910817790208
00500

流域の人々と歩む月刊誌

くまがわ春秋

2020 2 第47号

天女たちが住まう村



渡り鳥飛ぶ川辺川（相良村）© 山口啓二

最近のおもな出来事

1月12日（日）
▽消防出初め式（人吉市・相良村）
▽「上相良氏の城下町を歩こう」（多良木町内）
1月18日（土）
▽人吉市図書館「図書館まつり」
▽くまもと散歩「山江村万江清流コース」
1月19日（日）
▽第8回公認奥球磨ロードレース大会（水上中学校スタート・水上村役場前ゴール）
▽必勝！合格祈願ノ旅「合格勝ち取りツアー」（球磨村一勝地）
▽山江村新春駅伝大会
▽相良村民駅伝大会
▽八代市「野鳥観察会」（鼠蔵町研修所集合）
1月26日（日）
▽水上村「第56回桜の里一周駅伝大会」
2月1日（土）
▽「人吉球磨は、ひなまつり」オープニングイベント（人吉クラフトパーク石野公園）
▽第66回文化財防火デー防火訓練（岩屋熊野座神社）
2月9日（日）
▽はじめてのウンスンカルタ体験（人吉市「くまりば」）

今月の一言

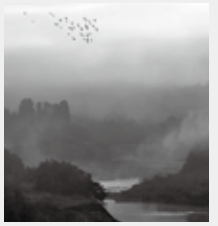
『文読む月日』（レフ・トルストイ編著　北御門二郎訳）より

もし君が働きもしないで収入を得るならば、それはきっと誰かほかに、働いたのに収入がない人がいるのである。

（メムノニードイ）

表紙写真

渡り鳥飛ぶ川辺川（相良村）



朝晩の寒さも次第に強まって来て、カモなどの渡り鳥が飛来するのが見られます。早朝の川辺川ではすでに鳥たちの活動が始まっています。いつものように夫婦橋から霧の風景を狙っていたらうまいこと集団でやって来てくれました。

撮影／山口啓二（人吉市）

本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

2月号（第47号）目次

各地で恒例の雛祭り開幕…3
おっとわっとあすび㊲　松舟博満…12
柳人があじわう漱石俳句㊼　いわさき楊子…13
「山の中の海軍の神社!?」　福田晃市…22
建築みてある記㊷　森山　学…24
漢和字典は面白い㉚　鶴上寛治…29
「あがっ段」㊹　上杉芳野…30
韓国「全州」訪問記㊤　宮崎勇市…32
記憶の落ち穂㊻　坂本福治　…37
住みたい田舎ランキング②　岐部明廣…38
「黒仏様」葬　弘伸…40
谷口巳三郎物語②　上村雄一…42
お休みどころ通信⑫　興野康也…48

追悼　瀬戸致行先生

・我が友の旅立ちを悼む　冨永和信…6
・瀬戸先生との出会い　村口和彦…8
・瀬戸致行会長の功績　尾方保之…10

天女たちが住まう村②

楠原　正元…4

鶺鴒短歌会　一月詠草…50
倉敷便り㊲　原田　正史…51
砂時計⑮　小野武己…54
「伝統文化の消滅」武井京子…59
小説・相良清兵衛㉖　山口　啓二…60
俳句大学投句欄③　永田満徳…65
千載列青史…68
「余人をもって代えがたし」久馬　凌…70
資料「平均寿命」…72
いもご短歌会…73
字図で見る球磨の地名㉟　上村重次…74
くまがわ学習塾㉜…77
ひろしの…げっかん・ぎひょう…78
外来語から学ぶ英単語㊼　藤原　宏…78



故　村上和男さんを偲ぶ

・鬼拳と酔舞　吉若文教…14
・残されたメッセージ　浦田佳代子…15
・くまがわの神さん仏さん㊷　宮原信晃…17
・へその緒　春秋…20

巻頭言

板書

教科書の内容を説明し、特に重要な項目を黒板に書き、生徒たちはそれをノートに写し、それを通じて知識を蓄えていく。白色だけでなく、赤色や黄色など、いろいろな色のチョークを先生は利用し、メリハリをつけてくださる。その場で、思いつきで、板書なさるわけではない。授業の前に、くりかえし教科書を読み、どうすれば一番わかりやすく、生徒に理解してもらえるかを考え、工夫をほどこされる。板書しながら、生徒の様子をうかがい、上手く説明できているかを確認なさる。ときには、生徒を指名し、質問をなさり、教科書を理解しているかを調べられる。試験も同じ要領で作成なさっている。生徒に物事を教えるのはひどく難しい作業で、先生たちは、いつも、そのことで頭を悩ませているにちがいない。このように云うと、現実離れした話で、じっさいには先生たちは、それほど熱心に授業をしているわけでなく、マニュアルにしたがっているだけで、ずいぶんいい加減であるといった反論を受けそうである。授業以上に難しい「生活指導」があるし、部活動もある。学級内、校内で生徒間にイジメが発生したら一大事である。

イジメだけでなく、校内の出来事は細かく文章にまとめ、校長先生や教頭先生に提出し、教育委員会の先生たちにも報告しなければならないことになっている。校長先生や教育委員会の先生たちへの報告義務には強い力が働くので優先順位が高くなって、その代わり、ほかの作業はおろそかになってしまうが、時間にかぎりがある以上、それは仕方ない。それが先生たちの実情ではないか、というのである。口の悪い人は、教師は収入を得るための職業のひとつにすぎず、無難にすごすことだけを先生たちは考えているだけだと話す。教育現場を知っているわけではないが、板書をする先生の姿は凛々しい。パソコンの画面で感じない表情がそこにはある。子どもの読解力は先生の声を聴き板書の姿をみることで培われると思うのだが、政府・官僚は、そのように考えていない。すべての生徒にパソコンを一台提供し、それで授業を効率化するのだという。自分たちの仕事のやり方を生徒たちに求めているようにしか思えてならない。

（春秋）

各地で恒例の雛祭り開幕

人吉球磨は、ひなまつり
八代市では「城下町」と「ひなぐ雛祭り」



人吉クラフトパーク石野公園でのオープニングセレモニー

広域観光イベント「人吉球磨は、ひなまつり」が2月1日に開幕、人吉クラフトパーク石野公園でオープニングセレモニーが行われた。3月22日までの期間中、郡市内の施設100カ所以上で華やかなひな人形を展示。また、3月3日の「桃の節句」を中心に趣向を凝らした多彩な催事が展開される。



八代市では2月15日から、本町・通町商店街の「城下町『やつしろ』のお雛祭り」と、日奈久温泉街の「ひなぐ雛祭り」が開幕。国指定名勝「松浜軒」をはじめ、商店街や日奈久温泉街など市内各所にお雛様が飾られ、スタンプラリーやお茶会などさまざまなイベントが開催される。

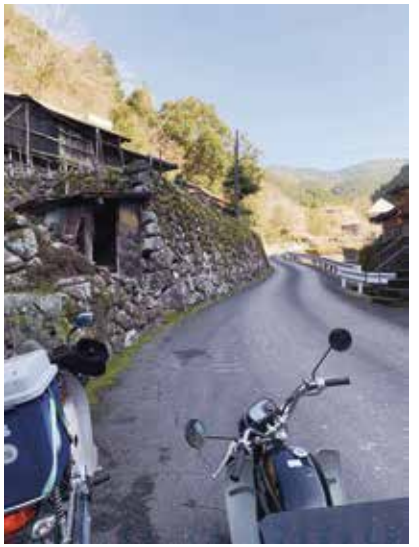


日奈久温泉街では観光交流施設「日奈久ゆめ倉庫」や各旅館にひな飾りを展示。毎週土、日には手のりサイズのひな人形作り体験がある。八代市の催しは3月8日まで。

天女たちが住まう村②

楠原 正元

坂本町の「枳（げず）の俣（また）集落」に立ち寄った。オッサン二人で集落内を歩き、ある一軒の妙齢の女性のお二人に出会った。





「こんにちはぁ、やっちろから来ました」

「まぁ本にな。こけ来てすわんなっしぇ」

「お茶と漬け物しか有りまっしぇんばってん、どうぞ」

「今日は天気の良うして温ござすでゆっくりしなぁまっしぇ」

のっけから、至れり尽くせりのお接待に預かってしまった。

「ここは何軒どま有りますか?」

「昔は40軒たいわん有りましたばってん、今は4軒しか住んどりまっしぇん」

「6人しか居りまっしぇんとばい」

住む人の三割集い、日向ぼこ

「家は100年近く経って…」

「病院と買い物は…」

「鹿どんが来て…」

「また、遊びにお出でなさりまっしぇ」

「そうそう、ニッケ玉どまくわえて行きなはりまっせ」

いやはや天女お二人。ぜひ、いま一度。行かずにおりますまいことか。ありがとうございました。ありがとうございました。



あとで調べてみたら、同集落は坂本の鮎帰・川原谷集落と山ひとつ隔てた場所であった。そういえばむかしは、「西福寺にお詣りにいっていた」という話もうかがっていたのであった。川原谷集落に向かう道は、いまは、荒れ果てて山道は分からなくなっているが、以前は、「一本杉」を境にした山道があって、人の往来が絶えなかったと聞いた。「枳」は「からたち」とも読む。「からたちの花」のように美しい人たちに出会えたのであった。

【くすはら・まさもと／八代市】

「誠心誠意」の人　追悼 瀬戸致行先生

我が友の旅立ちを悼む

人吉高校五回生　冨永和信

人吉高校五回生（昭和三十三年卒）の同期で、それ以後今日まで、私が敬愛して止まなかった生涯の友人瀬戸致行君が、ご家族の懸命の願いとリハビリの努力も空しく彼岸に旅立ってしまった。

彼を知るすべての人も同じ思いであると思うが、私にとってはことさらに哀惜痛恨の極みである。



瀬戸致行先生

私は人高在校時代、彼との知遇を得てから今日まで寸毫も変わりない彼への敬愛・友情は年を経るにつれて益々深まってきた。

彼の人柄や、医師をはじめとするその他数々の業績について今更述べるまでも無いところであろう。なぜなら彼を知る人みんなが異口同音に称賛するであろうから。

今、人が故瀬戸君とは如何なる人やと問えば、私はただ「彼は何人に対しても何事に対しても『誠心誠意』の人である」と言う。ちなみに私が長じて我が人生訓は誠心誠意としているのは、故瀬戸大兄の生来の人となり四文字を模範としたものである。

私の携わっている山口の同人誌を時折に届けていたこともあり、本誌「くまがわ春秋」に私の小稿を掲載させていただくことになったのも彼が仲介の労を取ってくれたからである。

平成二十七年に東京での高校同期会の折、彼も私も夫婦同伴であった。その時彼は「これまで自分本位の仕事で女房に迷惑の掛けっぱなしを反省している。これからは女房孝行をせんといかんね」と語った。私は「そのとおりよ。僕は数年前からそのことを実行しているよ。今からでも遅くないよ」と具体的に話した。

平成二十八年、山口で同期会を開催することになったときも、彼は夫婦で出席となっていたが直前に身内の不幸があり出席できなくなったことを、こちらが恐縮するほどに詫びてきた。

そして最後になる平成三十年、人吉での同期会も彼は極めて多忙のなか実行委員長として身を挺してくれていたが、突然体調をくずし入院加療となった。



2017 年、東京・築地本願寺にて

私は彼が懸命にリハビリ中の病院に家内と見舞いに行った。彼はベットの中からいつもの柔和な笑顔で、自由のきく右手を差し出し、私の手をしっかり握りしめて「医者の不養生で申し訳ない」と繰り返した。

私が「リハビリは大変だろうがしっかり頑張ろう」と言うと、「頑張って元気になるよ」と応えてくれた。私はあの時の彼の懸命な顔、言葉を忘れることは出来ない。

今はなす術も知らず、ただ君がこよなく愛した故郷の球磨川のせせらぎを聴きながら働き過ぎた御身を癒し、そして安らかに眠らんことを祈るのみである。

そして願わくば、瀬戸君の生涯にわたる諸々に及ぶ活動と、病床の彼のため支えてこられた順子夫人の悲しみに応対できる言葉が見つからないのですが、どうかこれからご自愛、安息に過ごされますことを念じてやまない。

浄土に旅立った瀬戸君が何よりもそのことを願っているに違いないからである。

令和元年十二月十九日　合掌

【とみなが・かずのぶ／山口市】

瀬戸先生との出会い

本願寺人吉別院責役　村口和彦

わが生命（いのち）の生かされて生きる不思議さを思い、めぐみ、いつくしみに感謝する機会が少なくなった今日（こんにち）、形ばかりを追い、物欲に溺れる現代の風潮が恩という言葉を忘れさせてしまったのか。「恩を売るものはあっても、恩を知る人は少ない」と声が聞こえる。

二〇〇〇年の浄土真宗・東本願寺の施本「報恩講特集号」に、大先輩の瀬戸先生が書かれた「恩のこころ」についての記述を見つけました。

「大の親不孝」瀬戸産婦人科医院長　瀬戸致行

古来より「父の恩は山より高く、母の恩は海より深い」と言われている。私は生来病弱で、亡き父母のことを偲ぶと、私の病気のことになる。五～六歳頃までは自家中毒をよく起こして「ひまし油」という下剤を飲まされた。これは気持ちの悪い臭いのする油なので泣いて拒否すると、父は床の間に飾ってある。先祖伝来の太刀の鞘を払って突きつけ、「飲まないと切る」と脅した。よく考えるとそんなことはしないのだが、そこは幼い子供の私はまた泣きながら飲んでいた。

風邪をこじらせて肺炎にもなった。今度は母が私の小さい胸に「からし湿布」を五分間ほどしてくれた。この湿布は皮膚を温めて循環をよくするためだったのだろうが、熱くてたまらず「早くとって」と言って泣いた。

小学校低学年の頃、夜間に高熱を出し、熱性けいれんを起こしたことがある。勿論、私は意識をなくしていたらしく、朝になり、父が私の歯型の付いた人差し指を見せてくれた。父は突然の歯ぎしりで舌を噛まないように、とっさに自分の指を私の口に入れたのである。

昭和十七年、小学三年生の時、肺門リンパ腺炎のため一年休学することになると、私の休養と栄養補給のため、父は一家を挙げて大阪から熊本へ帰ってきた。父には自分の栄進より子供が大事だった。



本願寺人吉別院　親鸞聖人 750 回大遠忌法要にて
（左：瀬戸責役、中央：本願寺人吉別院ご輪番、
右：浄土真宗本願寺派本願寺第 25 代ご門主）

中学、高校も病気がちな私を見て「自分の体を自分で管理するため医師になれ」と勧めてくれた。しかし私の病弱は大学に行っても治まらず、医学部専門課程四年間の冬は毎年風邪から肺炎になり、下宿まで母が来て看病してくれた。そんな時、半身不随だった父は一人で家業の養鶏をし、食事も作って食べていた。

医師になり三年目に結婚し、どうにか親の手を離れ健康になり、子供が出来て今度は長男のアトピー体質と次男の腺病質との付き合いが始まった。自分の両親も私以上に心配したのだろうと、「子を持って知る親の恩」を身をもって感じさせられることとなった。生来病弱であることで両親に看病してもらい通した私は大の親不孝者であろう。

（二〇〇〇年十一月）

まずは瀬戸先生長い間お疲れ様でした。本願寺人吉別院の仏教壮年会会長としてお寺さんをお手伝いするようになったのが十八年前、私は四十六歳。先生は既に四十歳の時から総代を経て責任役員というお寺にとって重要ポストをされ二年前までの四十四年間続けてこられました。産婦人科医師として大変なうえ良くぞ大役を引き受けられたことには感謝致します。ただお仕事上、医院を空けることができないため、ご本山団体参拝等がかなわずじまいでしたね。経年とともに総代さんの引退等が出てきたことにより私も二〇一三年に総代を拝命し、ご一緒にお寺の経営と行事を司ることとなりました。お時間かあれば必ず奥様とともにお晨朝（じんちょう）（朝のお参り）に来られ聞法にいそしまれておられました。

二年前でしたか『そろそろ責役を引退させてもらえないだろうか、八十五歳になったんでゆっくりさせて』と引退宣言されたのです。その後、責役の話が輪番より持

ち上がり、わたくしめが引き受けることとなりました。長年に渡り功績を残され、先生のお念仏申す思いを引き継ぎ、そしてありがたく受け止め、アドバイスを頂きながら、お寺と自分のために精進していこうと思ったその矢先でした。体調を崩されたのでした。

しばらくしてお見舞いに行きましたところ、英語の辞書と英会話の本を読まれていました。ほとんどお仕事上、旅に行けずじまいだったので英会話の勉強をも一度やり、外国にも行くんだとおっしゃっていました。回復され、も一度海外に行かれて欲しかったし、たくさん国内の旅もして欲しかったです。お晨朝でもずっと一緒に聞法したかったのですが、それもかなわぬこととなりましたね。非常に残念だったことでしょう。残されたわたくしたちが、先生同様いつまでもお念仏申す日暮らしをさせていただきますね。ありがとうございました。

南無阿弥陀仏　合掌

【むらぐち・かずひこ／人吉市】

瀬戸致行会長の功績

人吉くま映画文化協会副会長　尾方保之

瀬戸致行会長が昨年十一月末にご逝去され、早くも三ヶ月が過ぎました。ご訃報を知ったときの驚きと悲しみを今も忘れることは出来ません。一昨年十月、病院に一度だけお見舞いに行っただけで失礼してしまい、永遠の別れとなったことが悔やまれてなりません。

先生は一九八一（昭和五十六）年、穴井那津二会長の後を引き継がれ、人吉くま映画文化協会の第二代会長になられました。産婦人科医として忙しい毎日にもかかわらず、現在までの三十六年間、会長として人吉球磨の映画鑑賞運動の発展に尽力して下さいました。

よって「人吉くま映文協」は、昨年までに百回を超す「名画会」の上映や、三十回の「映画祭」の取り組みなどを成功させることが出来ました。そして、昨年四月一日には「映文協創立四十年記念祝賀会」を盛大に開催することが出来ました。人吉出身の中原丈雄さんを囲んでの祝賀会での、先生の明るい笑顔が印象的でした。

先生は映画が趣味で、邦画はもちろん洋画に関する書籍を多く読まれ、多くの作品を鑑賞されていました。先生から映画の裏話や作品の視点などお話しいただいたことが、楽しい思い出となっています。先生の映画談議を聞くことが出来なくなり、寂しい気持ちでいっぱいです。

「人吉くま映文協」は映画産業の急激な変化のもと、厳しい運営状況にあります。今後、活動を継続・発展させていくためには、新たな取り組みや活動の工夫が求められています。他の鑑賞団体との協力を得ながら、活動の継続と発展に全力を注いで頑張るつもりです。

先生もご浄土から、私たちの活動を見守り下さい。先生のこれまでの映文協発展のための尽力に対し、深い感謝と敬意を表すると共に、ご冥福を心からお祈り致します。

【おがた・やすゆき／球磨郡錦町】



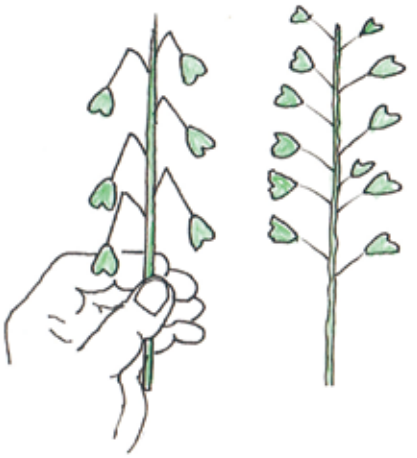
2018年９月、映文協運営委員歓迎会での瀬戸会長（前列右から二人目、入院１ヶ月前）

おっとわっとあすび その㊲

絵と文／松舟博満

ぺんぺん草

同じ「ぺんぺん草」て言いおっとの有ったが、まぁ一方んとは、カニクサちゅとのカズラんごてぇして、ほうでさくとん茎ば口ん銜えて一方ん手で引っ張ってまぁ一方ん手の指で弾いて、三味線の真似をばすっとばいいおった。



「ぺんぺん草（ナズナ）」

春の七草のいっちょでナズナちゅうとげなぁ、こん草はどけぇでっちゃ生えったで草むしりにゃべらりしおった。

七草粥どん食うて花どん咲きぎゃぁうったてば、花は下んほうからじゅんに咲きぎゃうったって、じゅんに三角んハート型ばした実になだす、そん実の固まった頃ば見計ろうて、上ん方はうち切って、十ぐりゃぁん実ば残けぇて、いっちょずつ実ば茎ん沿うて元ん方さみぁうち切れんごてぇ引き裂ゃて、みんなば同じんごてブランブランにして、親指と人差し指で挟すぅで、クルクルやって回せば、ブランブランしとっ実のクルンクルンつられて回りおった。

【まつふね・ひろみつ／青井阿蘇神社・文化苑「童遊館」】

柳人があじわう漱石俳句

—㊼—



いわさき楊子

―漱石は赤酒を飲んだか―

甘からぬ屠蘇や旅なる酔心地

（漱石31歳）

この句は前々号で、山川信次郎と年末から年始にかけて小天温泉（現在の玉名市）への旅で詠んだと思われるいくつかの中の一句として取りあげた。

はてさて注目すべき点に気がついた。「甘からぬ」とは甘くないということ。この句が詠まれたのは明治31年、熊本に来てから2回目の正月のことだ。つまり旅先で飲んだ屠蘇が甘くない清酒だったと推測される。あえて「甘からぬ」と詠んだのは、甘い赤酒の屠蘇を来熊一年目の正月に飲んだのではないだろうか。

熊本藩は江戸時代、清酒の製造や移入を禁じるとともに、保存のために入れる灰を藩外からも買い入れて赤酒を保護した。灰持酒（あくもちざけ）といわれる赤酒が、明治30年くらいまでは一般的だった。漱石の小説『三四郎』にも赤酒が登場する。今も熊本市では正月の屠蘇として甘い赤酒が用いられる。

肥後細川藩の米の集積地として栄えた熊本市川尻に、1867年（慶応3年）に創業した現在の「瑞鷹（ずいよう）株式会社」はいまも赤酒を製造している。いち早く明治の初めから清酒の製造にも着手した会社でもある。くしくも漱石の生まれた年に創業しているが漱石が瑞鷹を飲んだかどうかは不明だ。

私事だが、筆者の祖父（明治22年生まれ）は玉名の高瀬や伊倉にあった酒造業で樽職人として働いていた。あれやこれやと掲句に思いをはせた。

命には関係ないが酒が要る
愚痴ひとつぽろり地酒が語らせる

参考資料
・『熊本 酒と肴の文化地理』中村周作
2012年3月31日初版 熊本出版文化会館

【いわさき・ようこ／川柳と俳句の愛好家、熊本市在住】

追悼

故村上和男さんを偲ぶ

鬼拳と酔舞

吉若酔舞 次男　吉若文教

「鬼拳（きけん）さんお久しぶりです。みんな待っとたですばい」とでも聞こえてきそうな２０１９年師走、村上和男（鬼拳）さんが旅立たれた。そんな訃報を知ると寂しいものだ。

私が知る限りの村上和男さんは、公のお立場ではＢＳオカモトの副社長を歴任され、私的お立場では壮年最強のスプリンターアスリートで在られたと記憶する。

早朝より人吉市一円をジョギングや散歩されるお姿をお見受けする機会も数多く在った。

８年前88歳で往生した私の父と同じ職場でもあり、熊本では有名な「肥後狂句」人吉武者返し会の同じく会員でもあった。

村上和男さんと私の父は「鬼拳さん」「酔舞さん」と呼び合う仲でもあった。

ここに鬼拳さんが残された数多い肥後狂句作品の中から10句ほどを紹介させていただきます。

名人芸　防犯の日に披露する
気の毒さ　隣近所は閑古鳥
缶ビール　やっと車窓の褒められる
手弁当　こぎゃん側近ばかりなら
ふらアふら　風船ふかすまでもにゃア



村上和男さん

びっくり仰天　魚拓は思いつかだった
何でんなか　ただの墓参に行っただけ
酔うた　天下国家は明日にしゅう
戻り道　定年がまた振り返り
桜前線　いつとき破産見合わしゅう

平成24年７月28日、私の父の告別式の際、弔辞を頂いた事には深謝申し上げます。

鬼拳さん、無骨さん、酔舞さん、炭山さん、他多数の方々が人吉武者返し会を支えてこられました。

ここで私から村上和男さんへ。

「顔なじみ　受け継がれおる武者返し」
「のさんねえ～雲の上ば走らなん」

鬼拳さん、天国でも指折りながら句を数え焼酎酌み交わし、お浄土での武者返し会を楽しんで欲しいと願うばかりです。

【よしわか・ぶんきょう／人吉市】

残されたメッセージ

長女　浦田佳代子

穏やかで優しい父でした。

新しいものが大好きで好奇心に溢れた父でした。

86歳でFacebookを始め、いろんな人と繋がったり旧交を温めたり。好きな肥後狂句を投稿したり、家族に愛情たっぷりのメッセージをもらったり。

スポーツ万能でソフトボールや陸上競技にも一生懸命で、私たち自慢の父でした。

目蓋を閉じれば、いろんなことが思い出されます。

私が高校３年生のときのこと。

汽車通学をしていたのですが、その日は寝坊をしてしまい、朝６時半の汽車に間に合いそうにないと分かると、自転車に乗せて猛スピードで人吉駅まで送ってくれましたね。

お父さん、あのときは本当にありがとう。

私たちが小さい頃は、電車に乗って水前寺公園まで連れて行ってもらったし、夏は毎年のように二見海水浴場

まで連れて行ってもらっていました。まるで昨日のことのように、懐かしく思い出されます。

小学生の頃、私がよくこたつに入って寝ていると、「風邪ばひくばい。布団に寝なさい」と声をかけてくれてたね。

社会に出て私が遠くに住んでいた頃は、よく手紙をもらいましたね。身体のことをよく気にかけてもらっていました。

球磨焼酎が大好きで、とってもチャーミングで、ウィットに富んだ父でした。



次男の達男と父

iPadでよく母や家族の写真を撮っていましたね。先日、お父さんのiPadを見せてもらったら、私あての書きかけのメッセージが残っていました。

「親孝行したいときに親はなし」

たった一行だけ残された未送信のメッセージ、心に沁みました…。

お父さん、会いたかよぉ。

今、どこにおるとね?

本当にこんな良かお父さんはおらんよ。

お父さんが生涯かけて愛したお母さんを、今度は私たち姉弟がしっかりと守っていきますよ。

大好きな焼酎を飲んで、ゆっくりと休んでくださいね。本当にありがとう!

【うらた・かよこ／熊本市】

くまがわの神さん仏さん ㊷

岡留熊野座神社の風の中で

―手押し車で駆け下れ―

宮原信晃


駆け上れ岡留熊野座神社の石段を

あれからどれくらい経ったのだろうか。あさぎり町の岡留幸福駅からほんの3分も歩くと着く神社の石の階段。

今では苔むして今にも滑りそうな階段を久しぶりに上ってみた。21段上ると2m程の平地。そこからまた上に21段、そして平地。そして21段、そして平地。最後に22段、合計で85段の階段である。

何も変わったこともないこの階段には凄い光景があったのだった。

かれこれ15年ほど前、この階段の上に喜寿の祝い（77歳）を迎えるという故村上和男さんが、ここに居た。


手押し車で降りて行け

県立多良木高校の陸上部がこの階段を利用して体力、体幹を鍛えるために来て汗を流していたのだ。

その高校生に混じって村上さんは居た。

髪の毛は確かに高齢者であったので周りの高校生は「おじいさんが見学に来られている」とでも思ったのだろう。

村上さんが階段を上ってこられると、「こんにちは!」と若い声が神社の階段の上の風に溶け込んでいた。



これが人間手押し車だ

「まず、階段の下から3段飛びで上れ」と監督の声。「はい!」と部員たちの声。その声に村上さんの声も入っていた。

階段の下から見守る監督の前を2~3名ずつ横に並んで駆け上っていく。

村上さんも走っていた。ゴールとなる85段上には、間違いなく村上さんの姿が一番乗りの姿で立っている。

「まさか!?」。周りの高校生の動揺がきこえそうである。「あん人は凄かね!」。誰とはなく、声が聞こえる。

「さあ、人間手押し車をします。先ずは下から行く。そして上から下りるぞ」という監督の声に一瞬空気が凍った。

何をするのだろうか?

男子も女子も混合で、一人が地面に這いその足をもう一人が抱え上げ、這う役目の者は手に軍手をして前へ進む。平地だったらできる訓練も、なんと、この石の階段を上るのだ。手の力、上半身の力で上る。腹筋が一番いる。それを後ろの者足首の上を抱えるように支えて上るのだ。

悲鳴の様な声も聞こえたが、全員が上った。

そこからである。この上って来た階段を下りろ、というのだ。

前に這う役の者は全身の体重を両手で支え、後ろから前の者の足を抱えて下りるのだ。

二人の力が協力しないと、落ちる。

間違いなく前の者は顔から、後ろの者は前の者の上を飛び越して階段を転げ落ちる。

そこに、村上さんは居た。

「行きますばい、私の足を持って下さい。私や~軽かけん、女子の人でも持てますよ」とニコニコ顔で、階段の上に這った。さあ、行こう!

そんな声が聞こえて一段一段、村上さんの人間手押し車が下りていく。途中で2m程の平地で手や足を休め、また、22段を下りる。

危険なようで、計算しつくした監督の訓練は全員が無事に訓練を消化した。

終わってみれば安堵とか、達成感というより、もっと清々しい汗と漲(みなぎ)る若い血がほとばしる姿がそこにあった。

監督が全員に今日の訓練の評価。そして一緒に上り、下った神社の階段に全員で一礼してトレーニングは終了した。

監督が村上さんに近寄り「村上さん、今日はありがとうございました。村上さんの姿に生徒はいろんな事を気付いたと思います。やっぱり、マスターズの選手は凄いですね」と、村上さんに話し掛けた。

「いいや、いいや、今の若い人の力や走る技術には圧倒されましたバイ」と村上さんが帽子を取って髪をなで、深いしわの顔で笑った。

今でもこの階段に来ると、多良木高校も、村上和男さんも、今では居なくなったけれど、この岡留熊野座神社の風のなかにみんながいるような気がする。



父は陸上競技でマスターズにも出場していたアスリートでした（村上恵一）

【みやはら・のぶあき／FBお地蔵さん調査隊代表・人吉おおくま座の会事務局】

へその緒

春秋

「村上鬼拳」（本名　村上和男）さんは、昭和2年12月23日に、八代市の中心地・本町で生まれた。八代城跡の直ぐ近くの土地である。代陽小学校を卒業後、旧制八代中学（県立八代高校）に進学。その後、海軍に入隊し、松山海軍航空隊に配属された。三級滑空士の資格を取得し、飛行士を目指した。特攻隊の隊員になっても不思議でなかった。敗戦後、一時八代にいたが、直ぐに人吉に向かい、同地を終生の地にした。多くの人がそうであるように生まれた地への郷愁を捨てることはなく、記憶をたどるように八代市の写真をながめていた。家庭では八代時代を語ることもあったと聞く。



フェースブックの村上さんの顔写真。「図書館でフェースブックを探す父」。8年前のサラリーマン川柳である。そのころには、村上さんはフェースブックに関心をもっていた。肥後狂句の作家らしく社会の動きに敏感な人であった。ついでながら8年前のサラリーマン川柳では「『宝くじ　当たれば　辞める』が合言葉」、「女子会と聴いて覗けば六十代」。「妻が言う『承知しました』聞いてみたい」が上位3句であった。

村上さんは麦島勝さんの写真をとくに愛した。日常生活をさりげなく写す麦島さんの写真を愛する人は多い。ありふれた日々の生活の写真が村上さんの心にも響いたのであろう。麦島さんは村上さんの小学校の同級生であった。そのことも麦島写真を愛する理由であったかもしれない。麦島さんが世を去ったとき、村上さんは悲しみを率直に語った。

麦島さんは、戦争が終わったあと、故郷にもどって、あまりにもひどい惨状になっていると驚き愕然としたと述べているが、村上さんも同様であったろう。麦島さんは、惨状から立ち直り、人々が普通の生活を取り戻していく様子を写真で記録した。村上さんは同時代人として麦島さんの写真を眺めたにちがいない。それ故、海軍時代の姿をなつかしみつつも戦争を嫌った。振り返ってみれば、彼の八代時代は「戦争」の時代であった。それは人生でもっとも多感な時代であった。

麦島写真だけでなく、八代博物館の学芸員の紹介する八代の写真もお好きであった。長女・佳代子さんを白百合学園高等学校に進学させたのも故郷への愛着の結果だろう。同学園は本町のとなりの通町にあって、村上さんの実の姉上の通った学校でもあった。彼にとっては安心できる学校に思えたにちがいない。姉上も、姪（佳代子さん）が、白百合学園の生徒になったことを喜んだという。



八代城（松江城）跡。細川藩の筆頭家老・松井氏が城主をつとめた。この城を中心に八代は栄えた。村上さんの母校の代陽小学校は城の近くにある。長女佳代子さんが通学した白百合学園も以前は城の近くにあった（現在は、新八代駅の近くに移転している）。

人吉に向かったあと村上さんは、人吉の住民として生活し、人吉の人として天国に召された。村上さんだけでなく、故郷を離れて、別の地で人生をまっとうする人は多数いる。そうした人たちの大半は村上さんと同じように、どこかで生まれ故郷と「へその緒」でつながっている。村上さんは、「荒城の月」をハーモニカで演奏されるときがあった。そのとき戦争直後の八代を思いだしていらっしゃったのかもしれない。



荒瀬ダム建設地近くで行商する人々。同ダム建設中の道は写真のような状況であった。同ダムは球磨川の流れをせき止めたが、それにあわせるかのように、八代―人吉間の道路（国道219号線）開通作業が実施された。村上さんが人吉に向かわれたとき道路でなく肥薩線を利用されたはずである。

山の中の海軍のまち紀行

山の中の海軍の神社!?

福田晃市

人吉球磨は近年、「山の中の海軍のまち」としても全国的に有名になってきました。戦後70年以上にわたり放置されてきた人吉海軍航空基地跡が、２０１５年からの官民一体の取り組みによって脚光を浴びるようになってきたからです。

さらに人吉球磨には、あまり知られていませんが、実は日本海軍に興味関心のある人たちから注目されている神社があります。相良護国神社（人吉市）、市房山神宮（水上村・湯前町）、潮神社（湯前町）の３社です。

今回、これらの神社を「山の中の海軍の神社」と総称して、ご紹介します。

●相良護国神社と駆逐艦「秋月」

相良護国神社では、かつて駆逐艦「秋月」の慰霊祭が行われ、元「秋月」乗組員の戦友会・秋月会が記念に植樹し、標柱を建立しました。さらに元「秋月」乗組員の池上峰次さんが「秋月の記録を残したい」として「秋月」の絵を奉納されています。

そのため、日本海軍に興味関心のある人の中には、「秋月」とゆかりのある神社とみなして、参拝される方もおられます。

●市房山神宮と軽巡洋艦「球磨」

市房山神宮は本宮・一の宮・里宮の３宮から構成されていますが、その祭神はかつて日本海軍の軽巡洋艦「球磨」の守護神として、その艦内神社に祀られていました。このことは大正14（１９２５）年11月12日付『呉新聞』（広島県立図書館所蔵）に記載されています。

なお、人吉球磨の歴史に詳しい黒肥地改太郎先生の調べによって、昭和２年の観艦式において、相良子爵が「球磨」に乗艦されたことも判明しています（昭和３年１月１日付『人吉新報』に記事あり）。人吉球磨とゆかりのある軍艦だったことが伺えるエピソードです。

市房山神宮里宮神社（湯前町）では、艦内神社研究者の勧めもあり、「球磨」が戦没した１月11日に慰霊祭が行われるようになりました。軍艦をあしらった御朱印は、愛知県の矢作神社に次いで２例目で、全国的に注目されています。

さらに「球磨」の歴史を後世に伝えるため、境内に軽巡洋艦球磨記念館が開設され、全国はもとより、遠くは台湾や　東南アジアからも、多くの方が来訪されています。有名でない地方の神社を目当てに多くの来訪があるというのは、神社界では珍しいことだそうです。「球磨」進水１００周年の２０１９年には、遠く四国や関西の方が主催して、「球磨」関連のイベントも開催されました。



相良護国神社と御館御門



市房山神宮里宮神社



潮神社

●潮神社と駆逐艦「潮」

駆逐艦「潮」は、第二次世界大戦中に日本の敵国であったアメリカの潜水艦「パース」の乗組員を救助して、歴史に美名を残した駆逐艦です。そんな「潮」と名前が同じということで日本海軍に興味関心のある人たちから注目されたのが潮神社です。

もちろん、駆逐艦「潮」とは関係ないのですが、名前が同じだというだけでも好きな人たちにとっては、心ひかれるものがあるようです。

以上「山の中の海軍の神社」３社をご紹介させていただいたわけですが、新年をむかえた今、「海軍３社めぐり」をされて、かつての大戦で命を失われた方々に想いをはせ、祈願されてみてはいかがでしょうか。

建築みてある記 ㊷

ギャラリー8、植柳新町公民館をあるく

森山　学

今回は二つの小さな建物を巡ってみたいと思う。各々は著名な建築家によって設計されたものである。

まずは伊東豊雄建築設計事務所が手がけた「ギャラリー8」を訪ねたい。伊東豊雄氏はくまもとアートポリスコミッショナーも務める世界的トップランナーである。一九八〇年代から「遊牧民」などのキーワードで、流動的で軽やかな建築を追及してきた。八代市立博物館未来の森ミュージアム（一九九一年）はその時期の傑作のひとつである。

その後もせんだいメディアテーク（二〇〇〇年）や台中国家歌劇院（二〇一六年）などの話題作で、建築界に新風を巻き起こしてきた。仮設住宅団地のみんなの家の提案者でもある。ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞、ＲＩＢＡゴールドメダル（英国王立建築家協会）、ＵＩＡゴールドメダル（国際建築家連合）、建築界のノーベル賞とも言われるプリツカー賞などを受賞し、ゆるぎない地位を確立している。

そんな伊東氏は八代市立博物館未来の森ミュージアムを皮切りに、八代市で養護老人ホーム保寿寮（一九九四年）や八代広域消防本部庁舎（一九九五年）を次々と設計してきた。これら公共施設に携わりつつ手がけた小品が、ギャラリー8（一九九一年）である。

ギャラリー8は八代市通町の公民館に隣接して建つ。

ここにはかつて水月庵（観音堂）（寛永九年＝一六三二年再建）があった。その建て直しと、衰退傾向にあった通町商店街の復興のため、当時、通町共栄会は無謀にも伊東氏に話を持ち掛けたようだ。そこで水月庵を、地域団体の作品発表の場としてギャラリーに建て替える計画になった。通町共栄会は商店街復興のため様々なまちづくりを行った。伊東氏はそのなかで、このギャラリーのほか、沿道の街路灯のデザインも手がけた（いまでは街路灯は一本のみが残る）。



写真① ギャラリー8全景



写真② 力強い柱とカーブする壁

ギャラリーは道路から奥まって駐車場の突き当りに建っている（写真①）。建物は二階に持ち上げられ、一階はピロティになっている。二階はグランドピアノのかたちをしていて、メタリックな壁面が大木を避けながら柔らかくカーブを描く。ギャラリーのため窓はない。道路から見て突き当りにある建物を見た際、建物はまっすぐその視線を受け止めざるを得ない。このカーブは、直視されることを嫌い、緩やかに視線を逸らさそうとしているかのよう。

さらにこのカーブは、伊東氏の流動的で軽やかな建築のイメージを反映している。伊東氏は、幔幕が張り巡らされた空間を建築の原形とみなしていた。例えば花見をするとき、桜の木の下に幕を張り巡らせて領域をつくり、宴が終われば幕は折りたたまれる。グランドピアノのようなカーブは、この幔幕が風を受けてたなびいている様子なのだ。

二階に持ち上げられた建物はフラットスラブという構造である。梁



写真④ ギャラリー内の水月庵（観音堂）



写真③ 階段

はなく、コンクリートの柱が直接床を支えている。一本の柱でできるだけ広い床を支えようと、柱は上に行くほど太くなり、柱の上には大きな皿がのっている（写真②）。クレタ島のクノッソス神殿のような古風で力強い柱である。力強さと軽さが同居する。

鉄骨の軽やかな階段（写真③）で二階にのぼれば、水月庵の仏壇部分が現代的な内部空間のなかに移設されている（写真④）。左右に取りつけられている象鼻は、かつて向拝にあったものを再利用している。

続いて「植柳新町公民館（写真⑤）」へ。みかんぐみが設計し一九九九年に竣工している。「みかんぐみ」とはかわいらしい名前だが四人の建築家による設計事務所で、八代市ではこのほかくまもとアートポリス事業の高田あけぼの保育園（二〇〇一年）も手がけている。



写真⑤ 植柳新町公民館全景



写真⑥ ひとつながりの内部



写真⑦ 囲まれた庭

実は四人のうちの一人、曽我部昌史氏は伊東豊雄建築設計事務所の出身で、その所員時代には八代市立博物館未来の森ミュージアムを担当している。くまもとアートポリスでも、アドバイザーとして伊東氏をサポートする。

植柳新町公民館はその名のとおり、八代市植柳新町にある。

町内会の小規模公民館でありながら、町内建設委員会を組織し、指名設計競技、町内会での選定、建設委員会の設計監理という十六年の過程を経て実現している。

町内のさまざまな寄り合いに応えるべく、細かく部屋を分節していない。キッチン、板間、和室の三つがならび、引き戸で仕切られる（写真⑥）。三つの部屋に沿って、障子を境

に縁側がある。建具はすべて床から天井までの高さで垂れ壁や欄間はない。建具を開ければワンルームの大空間になる。

縁側の先に庭があり、ガラスの掃き出し窓はやはり床から天井までの高さで、床高も低い。掃き出し窓を開けると、屋内外が隔てるものもなく連続する。屋内外にこだわらない自由な活動が生まれそう。

大空間になるこの一直線の建物に玄関部分がくっついて、建物は全体でL字型になる。庭はこのL字で囲まれて安心感がある（写真⑦）。

外壁（写真⑧）はガルバリウム鋼板と県産材の杉板、縁側の掃き出し窓は規格品を使っている。一見シャープでドライなのに包容力と素朴さがあって、しかもローコストという建築である。くまもとアートポリス推進賞選賞を受賞している（一九九九年）。

今回は、師弟関係にある二人の建築家がつくり出した小品を紹介した。そしてこれらは、町内の住民らが熱心に取り組んだ結果、実現したものでもあった。

【もりやま・まなぶ／高専教員、一級建築士、八代市】



写真⑧ 外壁の様子

漢字遊び　時には気分転換！

漢和字典は面白い

30

鶴上寛治

膏

軟膏（ぬりぐすり）があるからには硬膏（硬くて常温では融解しないが、体温に接すれば粘着性を生じる膏薬）というものもある。漢和字典には「膏」の意味として〈①肥える②あぶらがのっている③うまい④つやがあってなめらか⑤めぐみ⑥むなもと（心臓の下の部分）〉とある。字形は《高＋月》で、高は〈つやのある白い脂肪〉のこと。「病、膏肓に入る」という成語があるが、膏も肓（横隔膜の上の部分）も漢方治療で鍼の届かない体内の場所で、「手の施しようがない状態」を意味している。〈膏血をしぼる〉とかいう時の膏血は〈苦労して得た利益や財産〉。二股（内股）膏薬とは、あちらについたりこちらについたりして、定見・節操の無い者のこと。私が子供のころの軟膏は蛤の貝殻に入っていた。

珍

「何も珍しくもなんともない漢字じゃないか。」と言われそうだが、上田宜珍という天草の庄屋さんがいて、その読み方が〈よしうず〉とある。漢和字典の〈名乗〉欄に、ちゃんと出ていた。〈いや・うず・くに・くる・たか・のり・はる・よし〉と並んでいる。

最近の子供の命名――はたと首を捻るものが続々、先生方は大変。賞状を読むときは、あらかじめ本人に確かめてから読まないと大変な失礼となるので。診・疹・参にも含まれる旁部分は〈密度が高く、みちたりている〉で、そこから〈玉・めずらしい〉となった。「広辞苑」の〈うず（珍）〉には《神や天皇に関して用いる）貴く立派であること・尊厳なこと。》とある。珍神（うずがみ）。和同開宝（寶）は和同開珎ともいう。珎＝珍＝寶（宝）。

【つるかみ・かんじ／人吉市】



上杉芳野の「あがっ段」㊹

親子試合に感動



あさぎり翔成館の親子剣道大会（1月11日）

今から14年前、夫は自衛官を退職した後、車庫を増築し剣道場を作った。当時6名だった部員も、今では幼稚園児、小中学生など40名近くになった。地元（上村）の白髪神社の祭りには念願だった奉納剣道大会もできるまでになり、人吉・球磨の剣士はもちろんのこと、遠くは熊本市内からも来て頂いた。

子供達の元気の良い声が神社内に響き渡り、たくさんの見物者で賑わった。

正月明けて1月11日には鏡開きと共に親子剣道大会が行われた。

小さい子供に対して大きいお父さん、お母さん、じいちゃん。

子供たちは基礎をしっかり習っているので、見ていても気持ちが良い程に大きい声を出しバンバン立ち向かっていく。一方、大人のほうは面と胴は身に着けていても、まったくの素人。

初めは勇ましくメーン！メーン！と打っていくが後からは力が尽き果て、子供に打たれるありさま。それでもメチャクチャに打っていると親の方に旗が上がる。

子供は悔しがり、面、メーンと打っていくと、大人は逃げるばかりでズルカ～と、涙ボロボロ流してヒックヒック言いながら悔しがる子供達。一方、親は試合の二分間が長ーく感じられ、早く終了の笛が鳴らないかと思いながらハアハア言っている。

子供の一生懸命さに親は


小さな剣士の香菜子ちゃんと、剣を交える真由美お母さん。小さな体も大きな体も心はひとつ

子供の成長を感じる瞬間だ。

見ている方も涙が出るほど感動した。でも中学生になると又違う。親は子に負けてはならぬと必死だ。子は日頃の力をここぞとばかり、バンバン打ってくる。逃げ回る親、追いかける子、なんとテレビのドラマの様だ。私も息子の大志が小さい頃、メチャクチャに打って旗が私に上がったことがあった。その時息子も、すごく怒ってメーン！と言いながら小手を打ってきてデタラメだと言った。

自分達は先生から習っている通りにしているのに、デタラメに竹刀を振り回す親に腹が立ったのだろう。子供達もこうして少しずつ大人に成長していくのだ。

親子のふれあいが少ない今、こうして剣を交え心を通して親子が向き合った事を、大人になっても良い思い出として心に残るだろう。私が息子と試合をした頃は袴も身に着けた。その時、周りがクスクス笑うので何で笑うのだろうと思ったら、片方の袴に足を二本共に入れていたので、片方の袴がヒラヒラしていたのだった。

あの頃は痩せていたから入ったのだろうが、今は無理～アッハッハー。

昨年、主人は八段を受けに東京に行った。千六百人以上受けて、七名が合格だった。

ダメと解っていても子供達に何でも諦めずに挑戦することを教えるためでもある。勝ち負けの剣道ではなく心の指導、それがあさぎり翔成館館長のやり方の様な気がする。こうして剣の道に一生懸命になれるのも生徒あってのこと。今、子供達と親に感謝せずにはおられない。

剣士よ大きく羽ばたけ。

【うえすぎ・よしの／ボランティア観光バスガール、あさぎり町上】

韓国「全州（チョンジュ）」訪問記（上）

李哲さんを救う会全国連絡会代表　宮﨑　勇市

昨年９月の「李政美コンサートwith竹田裕美子」が多くの方々の協力と努力により大成功裏に終わりました。来場してくださった皆さんも満足いただけたと思っております。誌面を借りて御礼申し上げます。

日韓関係が悪化しているなか、李政美さんは「こんな時こそ文化の力が必要」と言いました。私たちも民間交流が大切だと思っています。政治の世界でいやな応酬をしていますが、経済にとっても文化交流にとってもスポーツ交流にとっても、民間交流にとっても何一つ良いことは無いと思っています。

そこで、コンサートのチラシに連絡先として名を連ねた５人で韓国を訪れることにしました。目的はもちろん民間交流です。全州在住で、知己の李東昌先生（高校で日本語教師をしており、韓国の日本語教育研究会事務局長）に会いに行くこと。そして、偶然同時期に韓国に行くことになった李哲に会うこと。李哲は10月６日が釈放された日であり、在日同胞良心囚の名誉回復の運動を続ける彼を呼んでの記念集会が開かれる事になり訪韓するとの事でした。

球磨郡錦町出身の李哲さんについては
本誌22号48頁参照のこと

出発前

私たちは今回、鹿児島―仁川往復でチケットを取っていました。ところが日韓関係悪化の影響で、運航停止になり、やむなく福岡発着に切り替えて、復路の別のチケットもキャンセルで運賃と同じぐらいのキャンセル料を取られました。追い打ちは、台風18号です。10月２日は、玄界灘直撃の予報が出され、出発を一日早めることにしました。飛行機を探し、宿を探し、タクシーやらレンタル携帯を契約しなおし、駐車場を予約し直しと、出発前からたいへんな出費となってしまいました。

区長もしている私は、一日早めたせいで回覧の配布が出来なくなり、仕方がないので前区長にお願いして代わりにやってもらうことにしました。



伝統家屋が保存されている「全州韓屋村」（10月４日）

快く引き受けてもらったので無事出発することができました。

１日目（10月１日）

イースタージェット（ZE644）16時55分発は無事離陸し、一路仁川空港へ。

仁川空港で荷物を受け取り、両替（１万円＝11万ウオン）をし、タクシーでソウルへ向かいました。運転手さんもホテルの場所がわからず、ぐるぐる回ってようやくホテルに着きました。

フロントには誰もいません。見たこともない眼玉みたいなのが置いてあり、それが話しかけてきました。「宮崎さんですか?」「はいそうです」。そうしたら高校生ぐらいの女の子が来ました。彼女は日本語は全く話せません。片言英語で、「まだ夕食を取ってないんだけれども、美味しい食堂は知らないか」と聞きましたら、「全州食堂」がいいと地図を書いてくれました。それを頼りに「全州食堂」を探すのですが、なかなか見つかりません。通りかかった学生さんに聞くと、スマホでナビを出し、説明してくれるのですが、さっぱりわかりません。結局食堂の近くまで案内してくれました。日韓関係が悪いのは政府の問題であることを感じる出来事でした。

全州食堂はチゲの専門店みたいで、これがいいと指さすと、５人だったらこっちのほうがいいですよ、みたいなことを言われて、じゃあそれお願いします。メッチュ（ビール）も当然の如く注文し、美味しい夕食にありつけました。すでに「全州」の旅は始まっていました。


「西大門刑務所歴史記念館」で説明する李哲さん

2日目（10月2日）

台風の影響で雨。朝食は「里山」という店でソルロンタン（牛肉のスープ）。もちろんメッチュも。

今日の予定は、午後に李哲たちに会うこと。それまでは、全州行きシャトルバスのチケット代を払うことと観光です。歩いて二時間ほどかけ韓国観光公社までいきバス代を支払い、あさっての全州行きのバスを確保しました。

この頃から徳さんが歩行困難に。彼も足を引きずりながら頑張って歩き、昼食の場所へ、参鶏湯（サムゲタン）とメッチュで昼食。ついに歩行困難の彼はホテルで休むことになり、私たちは東京から来ていた友人や李哲たちと落ち合う場所へ移動しました。コーヒーブレイクしながら待っていたのですが、道路が混んでいてバスが遅れそうだから、先に行っていてくれと電話が入りました。タクシーで予定の西大門刑務所歴史記念館に向かいました。ここは65歳以上は無料なので私たちは全員無料。一人がパスポートを忘れてきたのですが、「これを見ると分かるだろう」と受付で帽子を取り、頭髪の無い頭を見せましたら、どうぞどうぞと係の人も私達も大笑いで入れてくれました。

西大門刑務所歴史記念館は、日本の植民地時代に日本が建てた刑務所で、李哲が捕まった時も入れられた刑務所です。今は記念館として一般に開放されています。中学生・高校生・大学生など社会見学でたくさん訪れています。中に入って見学しているところに電話が鳴り、合流することができました。李哲は自らが入っていた部屋を、「私は二階のあの部屋に入れられていたんだ」と指さして教えてくれました。拷問のやり方や「担当」「掃除」などの言葉は戦後軍事独裁政権時代にも受け継がれていました。在日韓国人政治犯と言われる人たちもこれらの拷問を受けたのです。

11舎には「在日同胞良心囚」の展示室があり、李哲さんを中心とした良心囚のことが説明されています。

見学を終えて、李哲たち集会参加者の皆さんたちとは別れて、私たちは、地下鉄で夕食の場所「コリアハウス」に向かいました。李哲には、一人ホテルで休んでいる徳さんをタクシーに乗せてコリアハウスに送ってほしいと頼んでおきました。雨のせいでタクシーが捕まらず、徳さんには「先に食事を始めているから、テーブルに案内してもらうように頼んでおくよ」ということにして食事を始めました。


コリアハウスの「宮廷料理」

コリアハウスは、宮廷料理と伝統芸能を見せるところです。王様にでもなった気分で食事をし、ホールへ移動して、パンソリ（日本の浄瑠璃にあたる）・農学・伝統舞踊・民謡などを楽しみました。

帰りはタクシー組と地下鉄組に分かれました。この雨では地下鉄の方が早いはずでしたが、鍾路3街駅で下車して地上に出たものの、道が分からなくなり、さまよってしまいました。消防署があったので道を尋ねたら、親切に教えてくれ、ホテルに帰りつくことができました。

3日目（10月3日）

台風も去って曇り空。アワビ粥とメッチュで朝食。戦争記念館見学と青瓦台見学が今日の予定です。

貸切タクシー（運転手は日本語ができる）を予約してあったので、それに乗り、戦争記念館へ。ここは、韓国の歴史と朝鮮戦争を中心にした記念館で、やたらと広い。特に朝鮮戦争の部分には広いスペースがとってあり、北との関係を感じます。ゆっくり見るには一日かかる程です。それぞれは、中ではぐれてしまいましたが、約束の時間にはタクシーのところに集合することができました。そこから青瓦台へ。文在寅大統領に挨拶しようと思いましたが、門から中へは入れてもらえませんでした。挨拶は諦めて、五荘洞へ向かいました。

五荘洞には有名な冷麺の店があり、その前で下車。タクシーは四時間の貸切でしたのでここまでです。降りたところの右が冷麺、左がカルビの店です。

どっちがいい?と聞きますと「肉!」と皆が言いますので、カルビの店へ。この店には私は何回も来ています。前に来た時オモニと一緒に写した写真を見せたのですが、オモニはいなくて、代わりにレジにいた女性が写真をみて「ハルモニ」と言っていたので、その女性はきっとオモニのお孫さんだったのでしょう。写真を渡して、カルビの食事にしました。三人前のカルビを五人で食べて充分な量です。向かいの店の冷麺を出前で取ってもらって、二人前の冷麺をみんなで分けて食べました。


広大な広さの「戦争記念館」



カルビの店で昼食

食事が済んで、すぐそばの中部市場に行きました。ここは乾物を専門に扱う市場です。ノリとするめをお土産に買いました。事前に李哲に「日本へ宅急便で送ってくれますか」という文をメモして貰っていたので、それを見せたら、OKということで送ってもらいました。

この日はソウル鍾路で保守派の反文在寅のデモがあり、何万人が参加しているのか分かりませんが、全国から動員されているようでした。大型バスには「朴槿恵」・「朴正熙」・「李承晩」などが大きくラッピングしてあります。それも1台だけでなく何台もあります。

㊦に続く

【みやざき・ゆういち／球磨郡湯前町】

記憶の落ち穂

その㊻

絵と文／坂本福治

北御門二郎さん



昭和二十九年頃、私は人吉高校の生徒だった。湯前線で帰る時、英語担当の服部和實先生と座り合わせた。そのとなりに、見知らぬ男性が座っておられた。服部先生は私に向かって、「この人はね、東大を出て百姓をしておられるんだよ」と紹介された。「何ともったいない事を」と私は思った。松岡次賀先生のお供をした頃、あるレストランで何十年ぶりかにお会いしたが、北御門さんは私たちにも正座して話された。トルストイ関係のことは何も知らなかったが、「ただの人ではない」と感じた。

実は、松岡先生は、北御門さんの肖像を描く約束をしておられたのだが、絵筆を持たなくなって、かなりの年数になるので、「坂本君、かいてくれんな」ということになって、お引き受けした。お互いの都合に合わせた写生の約束の日が二月二十六日だったが、何故か二二六事件の日のような大雪で延期した。次は運良く北御門さんがテレビに出られる日だったので、写生には都合が良かった。

【さかもと・ふくじ／画家、人吉市】

住みたい田舎ランキング２０２０から人吉・球磨の未来を考える

人吉市医師会 会長　岐部明廣

その❷



住みたい田舎ランキング２０２０でも、大分県豊後高田市は総合部門で全国第１位だ。第１回から８年連続で３位以内を達成。今まさに「移住の聖地」として注目されている。

さて人吉市は何位だろうか？気になる。

前回「その❶」では住みたい田舎ランキング、大分県豊後高田市の社会増（転入者－転出者）および移住者（転勤・進学目的除外）数のデータをみた。

今回は、住みたい田舎ランキング第１位に繋がった豊後高田市の移住者増加対策を探ってみたい。

「百聞は一見にしかず」

令和元年10月15日の20時～21時49分に放送された★ＮＨＫ　ＢＳ１の番組「あなたの隣の奇跡～地域を動かした人々の物語～」が良い参考になる。

その番組の後半で豊後高田市の無料塾「学びの21世紀塾」や「移住・定住」の取り組みが紹介された。

「百聞は一見にしかず」である。

その番組をＣＤ－ＲＯＭに取り込んでみんなで見よう。

人吉市でも「課外授業」や「移住・定住」の取り組みはされているらしいが、本気度がまったく豊後高田市とは違う。

若い人はインターネットで移住地をさがす。

インターネットの広報も大切。

多くの移住者はインターネットで豊後高田市の無料塾「学びの21世紀塾」や「移住・定住」の案内・資料を見てその気になったらしい。その気にさせる凄さが豊後高田市にはある。



「あなたの隣の奇跡～地域を動かした人々の物語～」
（NHK のホームページより）

★ＮＨＫ　ＢＳ１の番組「あなたの隣の奇跡～地域を動かした人々の物語～」を見て、私が松岡隼人・人吉市長に豊後高田市の無料塾「学びの21世紀塾」の話をしたら、無料塾と言っても年間１０００万円かかると言う返事だった。

豊後高田市も取り組みから10～15年経てようやく、１３４４人／５年間の移住者増に繋がったのである。

仮に年間１０００万円で２００～３００人／年の移住者を確保できるなら、非常に安い投資である。人吉市でも30年後には人口が約35％減少すると試算されている。球磨郡ではそれ以上の減少だ。過疎市町村では人口比１％の移住者がいれば、30年後の総人口の減少を10％以内に抑えられるという試算がある。

過疎化に有効な手立てを打てないでいるわたしたちは無料塾「学びの21世紀塾」を真剣に勉強・研究・検討する価値があるだろう。

さあ、人吉・球磨のみんなで勉強・研究・検討しよう。（特に人吉市役所の職員のみなさん）

まずは★ＮＨＫ　ＢＳ１の番組を見て何かを感じよう。

財政難に苦労する自治体にお金を出してもらおうなんて毛頭、誰も考えていませんよ。

多くの人吉・球磨の人々は喜んで協力すると思いますよ。

私も協力しますよ。

【きべ・あきひろ／人吉市】

黒仏様

崇光寺住職　萼 弘伸



崇光寺の御本尊は、中央の御本尊と脇本尊の二体御安置してあります。この脇本尊は「黒仏様」と呼ばれ、代々大切に護られてきました。

崇光寺の創建は、一五〇〇年代まで遡ります。八代郡古麓の城主相良義陽家臣に橘武冬（宮原城主橘公忠の弟）という方がいました。武冬は、たびたびの武功により人吉の代官に任ぜられました。多年にわたる人吉での在勤中、四男（武忠）、五男（武良）が相次いで戦死した事をきっかけに、両子菩提の為、代官を辞職し、出家し仏門に入りました。名を「萼（はなやさ）教了」と改め、城主の許可を得て玖麻郡別府村（現在の球磨郡山江村別府（びゅう））に寺院を建立します。寺号を「崇光寺」と称し、真宗本願寺の末寺となりました。

弘治二年（一五五六）八月に教了が病死しますと、長男の教信が後を継ぎました。その頃から人吉藩では真宗の禁制が厳しくなります。真宗信者が増えて組織化が進むことで、一揆を起こす勢力となることを危惧しての禁制だったのでしょう。人吉山江で寺院を存続させることができなくなった教信は、妻子を連れ、近親の門徒と共に人吉藩を出ることになりました。金色で目立つ阿弥陀如来像を上から黒く塗りつぶし抱きかかえて、真宗禁制のされていない八代郡高田郷上松求麻村之内合志野（現在の坂本町合志野）の地に移って来ました。その後、教信は天正十八年（一五九〇）に病死しますが、教信の息子教念を中心に、地域の百姓衆の信任を得て「寺屋敷」を建立いたします。文禄元年（一五九二）のことです。肥後藩の許可を受け、崇光寺再建のこの年を開基の年と定め、教念が初代住職となりました。天明六年（一七八六）、第七世善瑞の時、火災で寺を焼失しますが、人吉山江の門徒衆の「洪水時、参詣に不便」との願い出により、四年後の寛政二年（一七九〇）、現在の坂本の地に移転し、再建されました。

人吉山江の地から四五〇年以上の間、幾度の困難を乗り越え、数えきれないほどの人々が、命懸けでお護りしてこられた、この阿弥陀如来像は、「黒仏様」の愛称で呼ばれ、念仏相続の象徴として現代に伝えられています。



現在の崇光寺（八代市坂本町）



山江村別府地区



別府の崇光寺跡

農業は論より証拠だ

谷口巳三郎物語②

上村雄一

戦争

巳三郎が旧制八代中学に入学したころ、日本は中国を侵略し、蒋介石・毛沢東などと戦い、英米との関係も極度に悪化させていた。そのようななかで、「赤紙」で軍隊にとられた者がしだいに増えていった。男は稼ぎ手である。その稼ぎ手を軍隊は奪ったのである。軍隊は「赤紙」をだした家に生活費を支給したわけではなかった。稼ぎ手のいない家族の生活はきびしい。兵隊になった兄の代わりに中学進学を断念し、家族の生活費を稼ぐために満州に「出稼ぎ」に出た者もいた。巳三郎の生家近くの者であった。満州の報酬は製紙工場の「3倍」であるなどの勧誘・喧伝が工場周辺では飛び交っていた。兄の出征で兄嫁とその子のために高等小学校を卒業するとともに、14歳で満州に渡った者もいたのであった。


谷口巳三郎

満州で稼いだ金は兄嫁の許に送金された。それは「弟の義務」であった。鉄の町・北九州に「出稼ぎ」に向かった家族もずいぶんいた。鉄に較べると紙は軽かった。製紙工場の労働者は「赤紙」で簡単に兵隊になった。戦中になると工場は労働者不足に苦しみ、「勤労奉仕」のため工場労働を動員された。巳三郎は八代中学に進学できただけでも運がよかった。学校の成績だけで中学に進学できたわけではない。財力のある家の子であることも進学の必要条件であった。巳三郎の家にはその財力があった。それでも巳三郎も国家の大枠に拘束されていた。旧制八代中学時代

にはゲートルを巻き行軍を教科にした。

その頃の少年は、なにを目指そうとしていたのだろうか。太平洋戦争直前の須恵村を同時代的に記録したエンブリー『須恵村』、エラ『須恵村の女たち』を読むとき、戦争の影は直截的にはでてこない。牧歌的な農村共同体の姿が浮かび上がってくる。少年や少女も抑圧的雰囲気のもとにいたようにはみえない。


坂本駅。出征軍人を見送っている


産業報国会（坂本工場）


勤労奉仕（坂本工場）

開戦直前から敗戦にいたるまでの間、若者の瞳は輝いていただろうか。巳三郎は百姓になると夢を抱いていたであろうか。「敵に勝つ」といった即自的目標はあったかもしれないが、それから進んで、自己の人生の目標を夢見る余力があったとは思えないものの、まったくの絶望的気分のもとにいたわけではないだろう。若者は、心のどこかで希望を抱いている。だから、若者の

瞳はどこかに輝きがある。未来を生きる者の目をしている。

もちろん、未来を強く意識する者は少ないであろう。自戒を込めて述べるが、戦争のときだけ思考が弱まるのではない。平和のもとでも、たいていの者は目標を立ててそれを目指して強く生きるわけではない。「目標に向かって意志的に行動できる」者は少ない。さほどいない。意思力は緊張と忍耐を要求するが、その圧力に耐えるのは難しい。戦争中は、とくにそうなる。戦争は若者の夢を潰し、その生命すら奪う。芦北農林高校で林業を学び、林業で生きることを望んでいた若者が戦争で死んだ。そういう例は数えきれないほどある。巳三郎は、南方戦線に従軍したとき二度死に直面したという。彼は恵まれた少年であったが、同世代の若者と同じく戦争によって人生を狂わされたひとりでもあった。

巳三郎は「農聖」と呼ばれた松田喜一のような人になりたいと望んでいた。いつから、そう思うようになったかは確認しようもないが、巳三郎が松田に強く惹かれていたのはまちがいない。松田の生涯をたどるとき、巳三郎は松田を明らかに意識している。

松田喜一

松田喜一は、明治20年（1887年）12月1日、下益城郡豊川村松崎（宇城市松橋町松崎）で生まれた。松崎家は代々農家で、祖父の喜七は用水工事のため私財をなげうって「底井樋（そこいび）」を設置したことで有名である。喜一は小学校卒業後、熊本農業学校（現県立熊本農業高等学校）に入学した。同28年2月農学校を卒業し、そのまま、同校の助手となる。農商工省の農業試験所九州支部の助手に転身し農作の実験・研究に本格的に取り組み始める。

同40年、徴兵検査に合格し「一年志願兵」として第六師団に入隊し、翌年少尉に任官される。直ぐに退役して帰郷。生家で農業を再開。そのあと新設された県立農業試験所に技師として従事し日本各地を廻って農業研究に努めた。特に麦作に力を入れ、「松田式麦作法」として研究成果を発表。3、4年の間にそれが県下全域に普及したので、松田の名前は、県内の隅々まで麦作法の松田として知られるようになった。麦作だけでなく、稲・粟・大豆・甘藷などについても新しい栽培法を工夫し、次々に発表されていく。



県立農業学校。明治32年（1899）設立。校訓は「敬天愛人」。喜一は3期生であった

農民生活の向上のためには、その組織化と普及のための雑誌の発行が不可欠であると松田は考え、大正7年農会の結成することにし、熊本市内の公会堂で発会式をおこなった。会場内は立錐の余地もないほどの参加者で、外にあふれた人で敷地内は埋め尽くされたと伝えられている。同年、月刊誌「農友」を発行。同誌を通じて、農法の知識の普及を図った。「農友」はその後50年にわたり発行されつづけた。

喜一は天皇を敬愛する人で、「農友」を発行するたびに皇室に献上した。「農友」の発行だけでなく、春と秋に、3日連続の講習会を開催。講習会には全国各地から参加者が集まった。後で触れるように八代郡昭和村に拠点を移すことになるが、千丁駅から講演会の会場まで長蛇の列ができ周囲を驚かせた。喜一は、「農友」発行や講演会などでは、どうしても限界があると考えるようになり県職員を辞し、農民を直接に指導することにした。

「農業は論より証拠だ。実施で指導しなければ農民は納得しない。そのためには自分で農場を持ち、そこに農家の後継者を集めて、直接指導しなければ駄目だ」

というのである。「農友」は、土や肥料の造り方、種の植え方などを細かく説明した農業専門の雑誌（農業のマニュアル本）で便利だが、細部にわたるまで細かく作法を説明しているため活用はむずかしく、講演会での説明では一般的になりがちで、農業指導に適さないと考えたのであった。大正7年「肥後農林商会」を設立。翌年「肥後農友会」を結成し、同9年4月「農友会実習場」を菊池郡黒石原（現在、西合志町）に設け、同年5月には阿蘇郡色見村（現高森町）に「分場」を置き、総面積60町歩の農

場を経営しながら、農家の子弟の訓導指導に当った。

実習場と分場は両方とも台地にあったので、集まってきた１００余人の実習生とともに彼は「陸稲」栽培に取り組んだ。しかし、同地は人の手が入っていない原生地（しかも、火山灰台地）で、いくら努力しても、予定どおりの収穫を得ることができなかった。他の野菜の栽培では一応成功したが、肝心の陸稲が不作で、これが経営に響き、それに経済恐慌が加わって大正13年に肥後農友会は倒産し、財産を差し押さえられるまでになった。実習場での生活は厳しく朝5時から夜まで仕事し、「豚も食わない」と揶揄されるほどの貧しい食事で我慢を重ねたが、成果はあがらなかった。その間も喜一は「農友」のための原稿を書きつづけ、睡眠時間は4時間もなかった。そうした生活を彼は生涯つづけた。



松田喜一の銅像（八代市昭和日進町
松田神社内）

それにしても、陸稲の失敗は大きな痛手であった。このままでは目指す農業後継者の育成はおろか、生活にも事欠く状態で彼の生涯の最大の危機であった。その状況をみて九州日日新聞（現在の熊日新聞）の社長山田珠一の尽力で喜一を支援する「匿名組合」が結成されて苦境から脱することができ、大正14年には県知事中川建造は喜一を県営八代開拓事業の嘱託とし、開拓地の造成を委託。翌15年、県営八代昭和干拓第二事業竣工、第一回入植。同地は昭和3年9月14日、千丁村から分離する形で「昭和村」となった。泉村、東陽村のほか各地から多数の者が入植した。実習場も、同年4月には、黒石原農友会実習所から昭和村干拓地に移転。昭和村に於ける実習所の教育経営を始める。同7年、熊本海外協会より満州開拓のため現地視察に派遣される。同13年、満州新京力行村に入植。同24年6月、昭和天皇が昭和村を訪問。喜一の名

前は一挙に有名になった。同43（１９６８）年7月3日、県立矢部農業高校（現矢部高等学校）の生徒の前で講演中に倒れて、死亡。享年80歳。

以上、喜一の略歴を並べてみた。巳三郎が松田喜一の経歴、人格、生活、信条をどこまで知っていたかは別にして、農民とともに同じ農場に住み、同じ仕事をおこない、若い世代に農業を伝え、後継者を育てる松田喜一の歩みは巳三郎に決定的な影響を与えたのであった。喜一は「国内の農民」に「農作の知識」を伝えるために努力した。巳三郎は同じことを「タイ」で実行した。二人は、農場をつくり、若者と一緒に団体生活を送り、ともに働き、後継者を育てた。喜一は、県職員としての農業普及に限界を感じ若くして県職員の職を辞し、民間人として活動した。巳三郎も定年の前年まで県職員として農業指導に従事した。専門家であっても個人で新しい農法（農作業の方法）を伝えていく時代は過ぎていた。それでも喜一の生涯を深く知るにしたがって、喜一のように生きたいとの思いをつよく抱くようになったのであろう。喜一は、雑誌「農友」を毎号送り、農場では毎日、日の丸をかかげ、君が代を歌う人であった。それ故、ＧＨＱの調査対象者になったが、天皇を崇拝しつつも、カトリック系の八代白百合学園に食糧援助をする人でもあった。同学園は巳三郎の妻恭子が戦時中に教鞭をとっていた学校で、巳三郎は喜一の援助の話を恭子から聞いていたにちがいない。戦地から復員し鹿児島大学を卒業した昭和23年の翌年の7月に、巳三郎は恭子と結婚した。巳三郎25歳、恭子22歳であった。

【うえむら・ゆういち／編集主幹】



松田家の墓（宇城市松橋町）

お休みどころ通信 ⑫

沖縄での児童青年精神医学会に参加する

精神科医　興野康也



児童青年精神医学会は僕が2つめに入った精神科の学会です。子どもの支援が地域に必要だけれど、支援法の実際がよくわからないので入りました。その後毎年に近く学会に参加していますが、毎回ためになる内容になっています。児童思春期の分野は精神科のなかでも比較的歴史が浅く、支援法も支援システムもまだ十分には確立していない分野です。なので診療していくうえで勉強することが不可欠なのです。

学会は3日間あり、今年は会場が沖縄です。学会に行くとなると移動も含めて5日間病院を休むことになり、休んだ分の仕事もたまりますし、僕の指示受けなどができないのでスタッフにとっても迷惑です。外来もできないので、その間の受診者には他の日に来ていただかなくてはいけないです。そういうわけで年々病院を留守にするのが難しくなってきているのですが、吉田病院に児童思春期の診療を定着させるためにも、意地でも参加していくつもりでした。

九州にいると沖縄は近く、飛行機は1時間強で着きました。会場である宜野湾市の沖縄コンベンションセンターの近くにあるビジネスホテルには、タクシーで15分ほどです。学会は全国各地で開催されますが、比較的楽に到着することができました。

沖縄はとても活気があり、来るたびにホテルやマンションが建っているのを目にします。観光客は爆発的に増えており、人口も増えており、しかも出生率は日本一です。タクシーの運転手さんたちの話では、台風が昔のように直撃せず、雨不足の際の断水にもほとんどならないので、住みやすいとのことでした。以前は沖縄の台風被害は甚大だったそうですが、建物がほとんど鉄筋コンクリートになり、電線も地中化されたので、停電することもないそうです。また各家に貯水槽の設置が義務付けられているとのことですが、断水も近年はないそうです。地震も洪水もほとんどないそうですから、結果的には災害が少ないのだそうです。

また海外の観光客にとっては過ごしやすい面が多々あるようです。沖縄は第2次世界大戦で甚大な被害を受け、その後も基地問題に苦しんできています。アメリカ兵の悪さの話ならいくらでもあると運転手さんたちは口をそろえます。それでも結果的には異国の人との共生に地域の人たちが慣れてきていて、おそらくそこが海外の人たちには「過ごしやすい」と感じられるのではないでしょうか。地理的にも文化的にも日本と海外の間にあるような感じで、かつての琉球王国のように日本とは「別の国」に近づいているのかもしれません。

とはいえ沖縄にも負の面はあり、離婚率の高さ、貧困の問題、子ども虐待の問題など、いずれも深刻だそうです。現代は暴走族はほとんどいないと思いますが、ホテルで夜に暴走族の騒音を耳にしましたから、非行の問題もあるのでしょう。児童青年精神医学会でもそういった子育て環境の問題も取り上げられました。

以下は、3日間のプログラムの内容です。

●シンポジウム「多様化する摂食障害への対応」（司会：井口敏之、森野百合子）

●国際学会連絡・国際交流基金運営委員会セミナー「アジアにおける児童虐待の現状とシステム構築について」（司会：金生由紀子、中村和彦）

●共催セミナー　神経発達症の診断―自閉スペクトラム症とＡＤＨＤとの関係を中心に―（本田秀夫）

●シンポジウム　沖縄県における「子どもの貧困」の現状と支援の実際（司会：福治康秀）

●シンポジウム　虐待の現場対応の実態（司会：原田聰志）

●共催セミナー　自閉スペクトラム症と併存症のつながりとつらなり：不安・抑うつ・強迫（岡田俊）

●福祉に関する委員会セミナー　あらためて子育て支援、在宅支援を考える（司会：井出浩、奥野正景）

【おきの・やすなり／人吉市】

鶺鴒（せきれい）短歌会

一月詠草

老い深く記憶失せ行く母なれど時々笑ふ顔の愛しさ
厳冬の凍て付く朝の霧の中登校する子等声弾ませて
守永　和久

初春に若きサーファー大波のトンネル貫けて滑りゆきたり
久々に旧知の友の集まりて青島の神へ二礼二拍
河内　徹夫

木蓮の大きな落葉掃きつつふと気が付けば新芽も出でて
珈琲をこよなく愛でし姉の家思い出抱き吾は住み継ぐ
中村美喜子

終戦の混乱時期の少年は読書どころの心境ならず
中学の野球で目覚む我が左腕剛速球でプレート立ちぬ
西　武喜

娘、孫　三代で着し振袖のアルバム並べひと日楽しむ
亡夫と最後に旅しし日南を涙こらへて同期と廻る
釜田　操

今までは気付かぬ小石庭にあり杖ではねのけそろそろ歩く
年賀にも具合悪しの数枚が八十路越へるを厳しく感ず
三原　光代

友妻の編みかけセーター仕上げつつ若き思ひ出話はつきず
亡き夫の得意料理を舌づつみ八十路のわれを亡夫は笑ふか
中原　康子

初春の夜明けの街は霧の中平穏願ひ旭日を待ちぬ
初夢は雪山歩き鹿の群れ精霊戴き百歳の春
橋詰　了一

五十年共に暮らしし家なれば妻のメモリー隅々までに
亡き妻の青きドレスは二階部屋聞こへて来むか清しき歌が
堀田　英雄

倉敷便り　37

絵と文／原田 正史

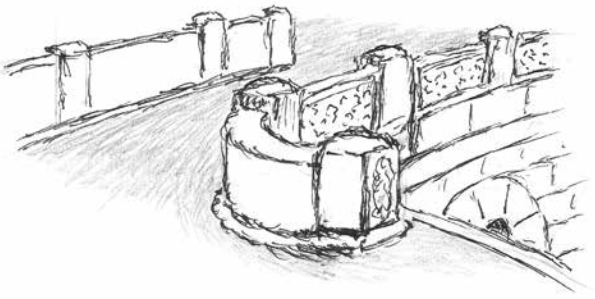
カラオケ画面に出現する人吉

私がお世話になっているデイサービスセンター・オリーブガーデンには、約80人の男女の利用者が、入り替わり立ち替わりやって来ます。その中には週一回の人もいれば、日曜を除いて毎日やって来る人もいるといった状態で、様々です。男女の割合は、男性が四割、女性が六割といったところです。

ところが利用者で、九州へ行ったことがある人となると、私以外に九州生まれの女性が一人おられるのを除き、僅かなものだと思われます。九州といっても殆どの利用者にとっては、南の方にある島で、自分たちには無縁の土地だという思いが強いようです。「私は熊本県の人吉市から来ました」と言っても理解出来るはずもないのです。日本三急流の一つである球磨川が流れている所ですと説明しても、三急流の知識がないのだから、どうにもなりません。むしろ「五木の子守唄の土地の近くから来ました」と言った方が良いかも知れません。

人吉に住んでいると、県外であってもかなりの人が人吉を知っているだろうと思いがちですが、特別な関係を持つ人以外、ほとんどの人が知らないのです。九州を対象とした観光案内の新聞広告でも、人吉はそのルートの通過地点にすぎず、地名さえも無いのが普通のことなのです。このような人吉を軽視した実態を見るたびに、無念の思いにかられます。それほどまでに人吉には観光対象物が無いのかというと、あり過ぎるほどにあるのですから、おかしなことなのです。例えば人吉城地下遺構はユダヤ教遺構物であって、国内は勿論、おそらく東アジア唯一の存在であり、国宝級の代物と言えるのです。

地質関係に目を移せば、三百万年ほどの昔、山地だけだった郷土の中央部が断層活動によって陥没し、人吉盆地が出現したのです。最初の頃は外部へ通じる谷間が無く、雨はそのまま盆地内に溜まり、やがて琵琶湖に次ぐ日本第二の湖となったのです。これが人吉湖であり、この過去の存在も高地からそ



倉敷川に架かる豪華な花崗岩製石橋

ついでに朝鮮戦争の出来事についても記述しておくことにします。当時、戦場であった朝鮮で参戦した米兵には、一ヶ月毎に一週間の休暇が与えられました。通常、休暇中の米兵の行動は、安全な九州の基地に帰り、夜になると福岡市内などのキャバレーでドンチャン騒ぎをするのが普通のことでした。ところがある日、一人の米兵が水上村役場に突然やって来たのです。役場には英語の出来る人はおらず、対応に困った役場は米兵を中学校に連れて来ました。早速玄関で英語教師たちと米兵との会話が始まりました。しかしキングズ・イングリッシュの教師たちの英語は米兵には通じませんでした。そこで英語は下手でも米語が多少は出来る私の出番となりました。

当時、二十代後半の理科の教師だった私の横には、吉村という年下の教師がいました。彼は私より米語は下手でしたが、会話で問題が生じた時、相談にのってくれて私を助けてくれました。先ず米兵には最も重要である、こんな山奥の村になぜ来たのかを聞きました。米兵には同郷の先輩兵士がいて、「水上村の湯山という所へ行け。あそこは俺たちの故郷と良く似ているから、故郷を偲べる」と教えてくれたからとのことでした。このことを校長に報告したところ、「君たちは今日は授業をしなくてもよい。米兵を湯山まで送って行きなさい」とのことでした。バスの来ない朝の時間帯だったので、米兵と話をしながら約4㎞の道を歩きました。

ここで米兵に「君の故郷はどこ?」と尋ねたら、「キャロラドー」と言う力強い返事が返ってきました。米兵の故郷はコロラド州であり、その故郷に強い誇りを持っているようでした。そのコロラド州が全米の州の中でナンバーワンとなっているものは、国立公園の数の多さなのです。すなわちコロラド州は全米一の風光明媚な所なのです。そのコロラド州が湯山に似ているということは、その湯山、すなわち市房山を中心とする郷土全体が日本有数の美観の地であることを意味するのです。球磨地方の人にとって周囲の景色は生まれた時から見慣れたものであり、何の変哲もない景色に見えるでしょうが、外部から来た人にとっては、目がくらむほどの美しさなのです。このことを十分理解して頂き、この冠絶（かんぜつ）した素晴らしい景観を守り続けていただきたいと願うところです。

私たちオリーブガーデンの利用者は、昼食前に全員で歌を歌います。更に昼休みが終わると、希望者がカラオケの前に集まり、一時間余り演歌などを歌います。この時、テレビの画面には歌詞と共に各地の風景などが映し出されます。ところが驚くべきことに、最も多く出現するのは球磨川の風景であり、その中心となるのは夕闇せまる人吉の球磨川であって、前方には大橋が、更にそ九日町の黒々とした旅館街が映し出されているのです。初めてこの光景を見たときには思わず「人吉だ」と叫び、周囲の人々を驚かせてしまいました。その他、球磨村一勝地などの球磨川の流れも出現します。また時々ですが、人吉城の堀合門付近の石垣が見られることもあります。

残念なのは郷土景観の主体となる独立山峯市房山が、江代山をはじめとする連山を引き連れ聳え立つ見事な景観が映し出されないことです。いずれにしても数々の郷土の景観が次々に映し出されているのですが、オリーブガーデンにあるカラオケ機器と同じものを使っている全国の施設や店では、このような映像が毎日流れているのです。したがって、それらの映像は私たちが住んでいる人吉市の風景を撮影したものですと伝えることが出来るなら、我が郷土の名前は全国に広がることでしょう。そして新聞広告の観光ルートには通過都市ではなく、滞在都市としての人吉が二重丸で大きく印刷され、九日町通りをはじめ、市内各所に観光客が次々に訪れることになるでしょう。

このことが夢物語に終わることなく、現実のものとなるよう、北方遙かな最果ての国、津軽弘前西福寺においでの、相良清兵衛殿にお願いし続けたいと願っています。

【はらだ・まさふみ／日本地質学会会員、倉敷市】

砂時計
―思い出るままに⑮

小野武己

〔Ⅳ〕母のこと

⑩手紙―伯父へ㊦

社長室を出て廊下に出ると、ポマードテカテカさんは二人を先導するようにずんずん歩いていく。二人は押し黙ったまま、遅れまじと時に小走りになりながら従いて行く。すれ違う人が皆、頭を下げて通り過ぎる。

「おじちゃんも、偉かとやろ。すれ違う人の皆んな挨拶しよらすけん」

背中に声を掛けると、彼は振り返って初めてニコッと笑い、返事の代わりに照れたように頭を掻く。ポマードで固めた髪がくしゃくしゃと乱れた。そして二人の肩をグイッと押し、エレベーターに乗り込んだのだった。

地下のレストランは明るく、観葉植物の植木鉢が沢山あった。空いているテーブルに座るとすぐに彼は素敵な制服を着た女の人を手招きして何か言いつけている。

「承知いたしました」女の人は軽く会釈して立ち去る。

「僕たちは何年生かね」

「俺いは6年生で、妹は3年生です」

彼はタバコをプカプカと吸い、鼻からスイーッと煙を吹き出している。

「おじさん、俺いの伯父さんな、偉かとやろ?」

「そうたい、この会社の中で一番偉いんだぞ」

「フゥーン、どがんふうに偉かとね」

「どんなふうにたって…、九州電力の社長じゃけん、とにかく偉かったい」

「東大ば出とらすけんが…やろか?」

「それもあるけどね…」

「ところで、おじさんな、どこの大学ば出たと?」

「おじさん? おじさんも、東京の大学を卒業したとぞ」

「へえー、東京の大学ですか」

さっきの綺麗な女の人が、お盆にのせてきたキラキラのガラス容器に盛り付けられた食べ物をテーブルに並べた。

僕と妹はその綺麗な食べ物を見詰めたまま、思わず息を飲み込んでしまい、会話は途切れてしまった。そして、ポマードテカテカさんに促されて食べ始める。

「美味しかぁ、初めて食べたたい」

「お兄ちゃん、甘かねぇ、美味しかねぇ」

「こいは何んて言うと」

ポマードテカテカさんに尋ねる。彼は2本目のタバコに火をつけていた。

「フルーツパフェ、っていうと。美味しいかね?」

彼はフーッと煙を吐き出すと、こげ茶色の良い匂いのする飲み物を、咽喉仏を上下させながら飲み込んだ。

僕は大満足だった。妹はスプーンをペロペロ舐めている。

地下の喫茶室から出ると、待たせてあった黒塗りのピカピカする自動車に乗り込んだ。自動車はビルの谷間を快適に走って行く。

後部座席にゆったりと座った僕はしたり顔して小さな声で妹に囁く。

「早岐の家にも来た事があったけど、こいが、UFOって、言うとたい。よかか、マコちゃん、しっかり、覚えておくとぞ」

ふと見ると、ポマードテカテカさんは僕の方をチラッと見て、ニタリとしたが、運転手さんと何やら親しげに話している。

僕は彼のニタリで妙な気恥ずかしさを覚えたが、何食わぬ風に話しかけた。

「おじさんな、会社で何んばしょっと? 皆んなが挨拶ばしよらしたけん、おじさんも、やっぱ、偉かとやなかと?」

ビルの廊下で質問したことの繰り返しだったけど、聞いてみた。助手席の背もたれを倒して振り向き僕に顔を近づけて、彼はニッと笑いながら答えた。

「おじさんの仕事は秘書っていうとよ。君の伯父さんの次に偉かとぞ」

運転手さんは何故か、ウフフッと笑った。

「フーン、そがんね。じゃ、今度来た時は、おじさんば訪ねてくるけん、よろしく、お願いします」

律儀な僕が顔を覗かせる。

「そうしなさい。おじさんがまた、フルーツパフェを食べさせちゃるけん」

そうこう会話している間に車は博多駅に着いた。

「切符を買ってくるから、ちょっと待ってなよ」

戻って来たポマードテカテカさんは一緒に客車の中に入り番号を確認し、「ここだ、座りなさいな」と言い、切符

と一緒に「汽車の中で食べるとよか」と森永エンジェルキャラメルと駅弁を手渡してくれた。

やがて発車のベルが鳴り、僕と妹が振る手に応えて気恥ずかしそうに、それでも手を振ってくれているポマードテカテカさんをホームに残して汽車は博多駅を離れていったのだった。この汽車は準急列車で座席には白い背カバーが付いていて、四人掛けの席に二人だけだった。僕と妹はウキウキだった。初めて食べたフルーツパフェと、ピカピカUFOの体験に興奮し、指定席に座り、しかも駅弁をペロリと平らげ、腹も満たって生涯最高の日だと満足感に浸りきっていた。

話題が途切れ、しばらく沈黙が流れる。妹は窓際に突いた腕に顎を乗せ流れる外の景色を眺めていたが、急に何かに気付いたみたい。

「ターちゃん、ターちゃん。何か来た時と景色の違うごたるとやけど」

「えっ、そがんことなかろうもん」

僕も慌てて窓の外の景色に目を凝らす。準急だから止まらない駅があるが、一つ二つと駅の名前を、目を凝らして読み取ると、確かに行く時とは違う駅名が通り過ぎていくのであった。

「ほんなこつたいね、違う線路を走っとっとたい。マコちゃん、次に止まった駅で降りるばい」

僕は急いで妹の手にバスケットを握らせデッキへと向かった。

長崎本線と佐世保線とは肥前山口で別れる。博多での余りにも刺激的な経験に有頂天になり過ぎた僕の失敗でもあったのだが、ポマードテカテカさんに長崎行きの車両の方に乗せられていたのであった。

二人が降りたのは長崎本線の「白石」という駅であった。駅の案内板に何故か「羊羹の町、小城」と書いてある。父がお土産に持ってきたのを五人の兄弟で分けて食べた小城羊羹の記憶がよみがえったが、それどころではない。通りかかった駅員さんに事情を話す。駅員さんはとても親切だった。乗り越しの料金は要らないから、ホームで待っていなさい、と言って、やがてやって来た上りの列車に乗せてくれ、「肥前山口で、佐世保線に乗るんだよ。今度は間違わんごと、帰るとばい」と口を酸っぱくして言われた。そして「汽車の中で食べると良か」と、二人の手にそれぞれ小さな小城羊羹を握らせてくれたのだった。そして、列車がホームを離れるまで見送ってくれ、二人は精一杯、窓から駅員さんが小さくなるまで手を振り続けた。

乗り換えの肥前山口まで寡黙を続ける二人。そしてそこで乗り換え、前の席のオバさんに佐世保行であることを確かめてやっと安堵したのであった。もう安心だ。列車はこのまま故郷の駅に連れて行ってくれる。

窓の外、黄昏が押し迫って来ていた。線路近くの、黒く影を落とした家並みからは煙がほんのりと棚引き、ポツポツと夕餉の灯りが点っているのが眺められた。

「僕の羊羹ば、半分こして食べようか。マコちゃんのは、お母さんとシー坊のお土産にするたいね」と言うと、「うん、良かよ」と、妹はバスケット中を確かめている。

「はいきー、はいきー、大村線、乗り換えー」

駅の拡声器、ゆったりと、それでも、大声で連呼している。

トロトロと居眠りしていた僕は、はっと目覚め、すっかり眠り込んでしまっている妹を揺り起こして、ホームに降り立った。

妹の腕を抱きかかえ、切符を駅員さんに渡し、出札口を出た。外はすっかり暗くなっていた。住み慣れた町の空気を胸一杯に吸い込み、ほっと安堵感に満たされた。が、同時に、急いで帰らなくてはお母さんが心配しているだろうとの思いが頭をもたげてきて、僕はもう一度、妹の腕を、よいしょ、と抱え直す。

「ターちゃん、お帰り、遅かったとね」

その声に、はっとして振り向くと、なんと、お母さんが立っているではないか。裁ち台に座って、せっせとお針の手を進めながら待っている母の姿しか思い浮かべていなかったので、ビックリしてしまった。余りにも遅くなってしまった二人を心配して迎えに来てくれたのだろう。

「あっ、お母さん…」

思わずウルウルなってしまった自分をごまかすかのように、大きな声で報告する。

「伯父さんに手紙ば、ちゃんと渡したけん。伯父さんな、心配せんでよかって、ちゃんとしておくからって、言うとらしたばい」

「良かったわ。お使い有難うね」

母と二人してまだ半分眠っている妹を抱きかかえるようにして家路を辿る。我が家は駅の裏側にある。

「お母さん、長く待っとったとやろ、急ぎの縫い物はなかったとね。迎えに来て貰ろうて、嬉しかぁ」

「そうね、ちょとばかり…。どの汽車で帰るのか、分からなくて…」

母の足取りは安心したのかカランコロンと軽やかであった。

カランコロンの音に、妹はやっと目覚めたようだ。

「あら、お母さん、ただいま。羊羹のお土産があるとよ」

そう言うと、しっかり握りしめてたバスケットを持ち挙げひらひらと振った。

「そう、帰ってからシー坊と一緒にご馳走になるけんね、ありがとう」

母は羊羹の経緯は知る由も無い。帰ってからゆっくりと話さなくては…。

カンカンカンと上りの列車が窓の明かりを線路に映しながら通り過ぎていく。遮断機が上がり、三人は薄暗い街灯に長短三つの影を躍らせながら幅広い踏切を渡っていくのだった。この踏切を渡り切ると、我が家はもう目の前だ。

突然、妹が母と僕の手を振り払って目の前の我が家に向かって走り出した。バスケットの羊羹とキャラメルが、ガサゴソと鳴っている。

僕も走り出そうと…ふと、母の顔を見ると、その両の瞼の辺りに、折からの月の光にキラッと輝るものを認め、途端に僕の涙腺も緩んでしまった。母の心配は如何ばかりであったろうか、僕は今一度、母の手をしっかりと握りしめたのだった。

「お母さん、晩のご飯は何ん?」

「鯨のステーキよ」

「うわぁ、ご馳走たいね、嬉しかぁ」

ガラッと玄関の開く音が聞こえる。妹が帰り着いたのだろう。

「お帰りなさい!」

弾んだ弟の声も聞こえてきた。

期せずして、母と僕は目と目を見合わせ、微笑んだのだった。そして、僕は繋いだ手を通して伝わってくる母の手の温もりを、もう一度、しっかりと確認するのであった。

【おの・たけみ／小児科医院院長、宮崎市大塚町】

伝統文化の消滅

武井京子

昨年の人吉文化協会の会員数は３００人あまり、一昨年より30名ほど減少した。所属団体数も減り、高齢者の割合が高く、若い人はほとんどいない。ひと昔前は60歳定年で、退職すれば趣味やボランティアなどしていたが、最近は元気であれば年齢に関係なく仕事をされている。そうなると町内の行事などのスタッフが足りなくなり地域の一体感が失われていく気がする。

昔の生活、衣食住すべてが変化して、礼儀も言葉遣いも何もかもが変わっていく。ＮＨＫですら、チコちゃんの番組で、大人に向かって「ボーっと生きてんじゃねーよ!」と言わせている。遠慮や配慮という心遣いはどこに行ったのだろうか。

また現在はスマホの時代。学校の休校もメールで届き、各種の連絡はスマホを見れば分かるので、時間や場所などは覚える必要はなく、記憶力も使う必要はない。機器依存が人間の脳にとって良いのか悪いのか。

話は変わるが先だって、小学生と接する機会があり、畳の部屋での食事となった。初めからかどうか分からないが、女子小学生があぐらをかいて食事をしていた。現代の住居はフローリング、椅子の生活が主流で、正座をする機会が減っている。最後の挨拶だけは正座してお礼の言葉を言って終わったが、きっと正座で食事をする経験がなく、高齢者とふれあう機会も少ないので、配慮することも知らないのだろう。

便利になった反面、日本人の奥ゆかしさが失われていく気がするが、世の中が変化していることを感じさせてくれた出来事であった。

【たけい・きょうこ／人吉市】

生誕450年記念
書き下ろし

小説・相良清兵衛 ㉖

山口 啓二

【前回までのあらすじ】「流罪」という裁きを受けた清兵衛は、弘前藩津軽家へお預けの身となっていた。弘前藩主・信義公は薬の製法、易学や儒学、兵法や開墾、さらには祖父三成との昔話をしきりに聞いてきて、六十年も前の話にも及んでいた。

「御家老様、誠にもって申し訳ございませぬ。この度の後継ぎの話しは無かった事にして頂けませぬか」

相良家の筆頭家老・深水宗芳は、嫡男摂津介が高森攻めの折に戦死し、後継ぎがいなくなったので軍七親子に相談をしていたのであった。

軍七は悩みに悩み、ついに結論を出した。宗芳も叶わぬ事と感じてはいたが、さすがに無念であった。犬童家は軍七の父休矣がまだ幼少のおり、一族が謀反に加わったとして惨殺され、幼かった休矣のみが寺へ預けられて一命を許されたのであった。軍七はこの事を深く気にし、我が犬童の姓が絶える事を憂いたのだった。

「そうか軍七殿、いや此度は無体なお願いをして申し訳なかったのう。佐馬助は先に自分に養子の声掛けが無いので、どうもそなたを羨んでいたらしい。我が弟織部は厳格な性格なれど、息子の育て方はどうも見誤ったようでござる。かくなる上は佐馬助を養子に迎え後継ぎとする故、軍七殿もよくよく手伝うて下されんか。この宗芳たっての願いじゃ」

「御家老様、もったいないお言葉にございまする。軍七、精いっぱい勤めて参りますゆえ」

「実はわしは佐馬助と軍七殿の二人を同格の奉行とするつもりでいる。なあにその事は殿にたってお願いするゆえ、ぜひ引き受けてくれぬか」

「あいや、それではまた佐馬助殿が機嫌を悪くされましょう。さすれば何卒佐馬助殿の補佐という立場で」

「いや、あ奴の力量ではこの相良家は持つまい。摂津介も同じ意見であったが、相良家を守るためには軍七殿、どうしてもそちが必要じゃ。これは筆頭家老のわしの最後の命と思ってくれ」

すぐに縁組が整い、秀吉の質から解放された佐馬助改め『頼蔵』が宗芳の養子となり、相良家家老職を引き継ぐ事となった。軍七も『兵部頼兄』と改名した。それを見届けるかの如く、深水宗芳は病で亡くなってしまった。

その後、秀吉の命で朝鮮を攻める折、頼蔵と頼兄両名には共に『相良』の姓が下賜され、相良家は殿を補佐する重要な役目を二人に託したのであった。青井神社や井ノ口八幡宮、矢黒神社、愛宕神社へ参拝し必勝祈願をし、菅原十島神社では頼蔵と頼兄の不和を憂い、三百首の連歌と裏面に互いの血判を押した誓紙までも奉納した。

出陣当日の文禄元（一五九二）年三月二十六日、青井神社で早朝より恒例の『寅の刻菊払いの儀』を取り行い、武運長久の祈願をして佐賀の名護屋城へ向かった。途中、一行が渡瀬から高沢、神瀬を経由して坂本にさしかかった二日目の夕刻、ここで野営をする事となった。ところが夜が明けると頼蔵一派四十名余りの姿が見えない。

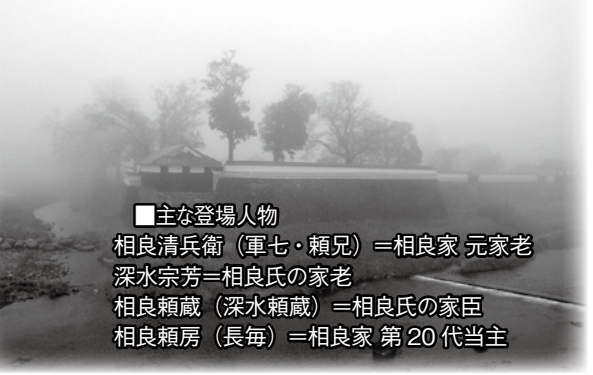
「申し上げます。今朝になって頼蔵殿はじめ側近ら四十人ほどがどこにもおられませぬ。昨晩は確かに我らの先で宿しておられましたのですが」

隊将内田伝右衛門が報告してきた。その頃まだ頼房の名を使っておられた公は

「なんと、頼蔵らが居らぬじゃと。さては頼蔵め、誓紙まで奉納しておるのに、まさかこの期に及んでおじけづきおったか」

「誠にもって不届きな。それでも誉れ高き相良武士か。殿、すぐに湯前の竹下殿に早馬を遣わし、我らはこのまま名護屋へ急ぎましょうぞ」

頼蔵はことのほか戦嫌いでそのうえ刀槍の使い方が未熟で、各社に誓いをたてての出陣だったはずなのに、おじけづいたか殿の命を無視して球磨へ引き返し、山田の高寺院



■主な登場人物
相良清兵衛（軍七・頼兄）＝相良家 元家老
深水宗芳＝相良氏の家老
相良頼蔵（深水頼蔵）＝相良氏の家臣
相良頼房（長毎）＝相良家 第20代当主

を頼って立て籠ったのだった。この恥を知らされた湯前の地頭であり頼蔵の後見人でもあった竹下監物に諭され、頼蔵は渋々その意見に従い臣下とともに名護屋を目指す事となった。

相良の本隊は名護屋の館には四月四日に着いた。一行は二番隊大将加藤清正の館に落ち付き、各軍が到着するまでの数日間をここで過ごした。四日後にようやく頼蔵一派も到着し、そして相良一同、隊大将清正との顔合わせとなった。すると相良頼蔵ここにあり、とばかりに清正の前に出て、

「清正殿、拙者筆頭家老相良頼蔵、それに我が殿頼房公にございまする。これからしばらくの間ご一緒して、清正殿と共に太閤殿下の命に従う所存にございまする」

「おう、相良殿は小藩なれど鎌倉以来の御家柄、我ら尾張中村の田舎侍とは格が違いまするからのう。薩摩が豊後・大友勢を攻めた折りにも相良軍は各所で先陣を飾り大活躍をなされたと聞き及びましたぞ。このうえは是非ともその戦いぶりを我が隈本の兵にも伝授いただきたいものじゃ。さしより我が小隊の補佐役を幾人か所望いたす。頼房殿、頼蔵殿、よきに計らい下され」

「はは、軍略につきましてはここに居ります兵部頼兄が優れております故、何なりとお申し付け下さいますよう。私めは我が若殿を守りたく存じます」

その後朝鮮に渡ってからの頼蔵は思った通り隊の後ろで吠えたてる始末だった。安遍城では真っ先に撤退を進言し殿に戒められた。この戦いではたった八百程の相良兵で明兵三万を撃退した。

それから一年半、朝鮮で一進一退を繰り返していた日本勢であった。

その頃、上球磨の湯前城主竹下監物の嫡男・外記義安のところに、太閤秀吉公からの書状が届いた。

「父上、太閤様から我が所領を召し上げるとの書状が届いてござりまするが、如何すれば」

「なに、所領没収とな。それは何としたことじゃ。もしかしたらお主、天領の米良に出入りしておったのを咎められたのでは」

「いえ、まさかそのような事が露見するとは決してございますまい」

「しかし義安、太閤様を侮ってはならぬぞ。いや待て、もしかしたらこれは朝鮮に同行している兵部頼兄の謀（はかりごと）とみた。あ奴め我が一族を恨んで太閤様に吹き込んだやも。このこと捨てはおけぬな。我が一族の安泰にもかかわることぞ」

頼蔵の後見であった竹下監物は、その嫡男義安が秀吉公の沙汰により田畑を没収され、これは頼兄の企みに違いないとし不穏の動きを見せたが、その事は朝鮮出陣中の頼房公にも伝えられた。すぐに公は頼蔵にその始終を尋ねられたが、頼蔵は、

「これは心外、拙者その件全く関与しておりませぬ。この事は監物殿独自のお考えやに」

と申し開きをした。そこで公は使者を遣わし監物親子らに切腹を命じられた。すでに監物ら深水一族を含む六百人は湯前城に籠城していたが、深水甚助らにより公の命令が湯前城内に伝えられると、抵抗する者は誰一人なく八月十五日、竹下監物、外記義安以下四人は切腹し、ようやく平穏に至った。

その年の秋、兵部頼兄は頼房公の命を受け四十名ほどの兵と共に球磨に帰還した。球磨で不穏な動きあればその鎮静に努めよ、との命であった。対馬、壱岐と渡り博多へ上陸した一行は釜山を出てほぼ半月後に球磨の地へ戻った。

父休矣から上球磨の様子を聞いた頼兄は、頼兄が帰郷する事を察知したのか不穏な動きはピタッと止まったことを知った。頼兄はその際、先ごろ亡くなった愛妻『その』の供養を、その実家の傍の石水寺にて行い、菩提寺として祀り石碑を立て観音菩薩像を奉納した。悲しみがより深く頼兄を襲った。

落ち込んではいられなかった。休矣と新しい城造りや街割りの計画をし、内紛にも備えておく事が使命であったからだ。城の周りに建てる侍屋敷をはじめ、球磨川の対岸には商人や職人、町人に至るまでの屋敷の整備にかかった。まだそのころ球磨川の北側は荒れた土地と竹藪に覆われていた。村々の長を呼び集め、先ずは街造りの区割りを決め開拓にかかった。街造りには安遍で城を警護していたときに丸目蔵人佐から詳しく京の町家について聞いていたすべてを参考にして、それを取り入れる事にした。普請奉行の父休矣ももちろん快く同意した。

「さすがは蔵人佐殿じゃのう、こういう街並みを見てきておられたとは。あのお方は剣に及ばず医術にも薬術にも易学にまでも長けていられると聞き及ぶ。頼兄、蔵人佐殿を大事にいたせよ」

「父上、朝鮮で色々と教えを戴きました。更にあのお方は敬けんなキリシタンでもございました。すでに『パウロ丸目』の洗礼名もお持ちにございまする。小西殿や黒田殿、宗殿とはそういった意味で人魂になさっておいでのご様子、キリシタン信仰とは拙者いささか合点がゆきませぬが、蔵人佐殿のお話から察すると武士も農民も商人も同じ立場にあるとか、まさに一向宗のごときに聞こえました。我が球磨も一向宗はご法度にしておりますが、そうなれば行く行くはいずれの宗派も認めねばなりますまいかと」

「相良家は一向宗は表立っては認めて居らぬが、先君のお考えではさもありなん。暫く前、義陽公まだ御存命の折りに儂にそう言っておられた。武士と民百姓、氏素性は全く違うがみな同じ人なのじゃ、それを氏の違いでわけ隔てしてはならぬと。みな同じ人ゆえ、同じ位を与えられて当然、とそのような事を申しておられた。相良家は格式のある家ゆえ、古来から禅宗を重んじて来たがのう」

「朝鮮に出陣なされている小西殿、宗殿、黒田殿はじめ各軍の将は、その殆どがキリストの教えを請うてございまする。拙者もいろいろと教えをいただきましたが、もう殺し合いなどしとうはござらん。キリスト教が戦を治めるものならばキリストを信ずるのも一考かと」

翌文禄五（一五九五）年春には朝鮮奉行石田三成が小西行長と図り、清正の悪行甚だしいと秀吉に訴えた。五月、清正は太閤秀吉から帰国を命じられ、六月末には頼房公も頼蔵らを同行して京都・伏見へ帰り、先に球磨の鎮静を命じられ帰国していた頼兄も、球磨から上京して合流し清正公と伏見城を訪ねたが、秀吉は目見得さえも許さなかった。丁度その閏七月十三日の丑の刻、畿内一円を未曾有の巨大地震が襲った。秀吉が居た伏見城もことごとく崩れ落ちた。藤堂高虎が秀吉に命じられ完成したばかりの方広寺大仏も大破してしまった。

（つづく）

【やまぐち・けいじ／人吉市】

俳句大学 Haiku University

季語で一句 Selected Haiku of this Month

このコーナーは、facebookグループ「俳句大学投句欄」で、毎週末に募集しているページからの転載です。

永田満徳選評・野島正則説明

https://www.facebook.com/groups/1538014679752252/

俳句大学投句欄 ❸

初夢（はつゆめ）　「新年―生活」

【季語の説明】
元日、または２日の夜に見る夢のこと。現代では「２日の夜に見る夢」が一般的になっている。初夢には、その年の運勢が表れるとされたことから、夢の内容で新年の運勢を占う。「一富士，二鷹，三茄子」の初夢を吉とする俗信がある。内容を覚えていなくて、もどかしい思いをすることも多いのが夢の特徴である。

桑本栄太郎
●
初夢の良い夢選び夢とせり
【永田満徳評】
初夢は一年を占う意味があるので、いい夢を見たいもの。掲句は一年の吉兆を初夢に託そうとして、「良い夢選び」、良くない夢は忘れて、初夢は「良い夢」であったとするところにおもしろみが出ている。

女正月（おんなしょうがつ《をんなしやうぐわつ》）　「新年ー時候」

【季語の説明】
元日を男正月というのに対して、１月15日の小正月を女正月と呼ぶ。昔の女性は、年末年始の接客や家事の多忙から解放され、15日頃になって、ようやく正月気分にひたれる。そこで、年始廻りをしたり、社寺に参詣したり、女同士で酒を酌み交わしたり、着飾って、芝居見物などにも出かけたようである。

向瀬美音
●
光るもの求めてデパート女正月
【永田満徳評】
「女正月」には自分の事に時間を使いたいという女性の願いがある。掲句の「光るもの」とは宝石の類であろう。自分への褒美の気持ちで、「光るもの」を手に入れたいという女性の心理がよく出ている。

大寒（だいかん）　「冬ー時候」

【季語の説明】
大寒とは、日本が太陰暦だった頃に、季節の移り変わりを知るために使っていた二十四節気という区分の一つで、一年で最も冷え込み、寒さが厳しい時期である。寒の水はその寒さゆえに極めて雑味がなく純度が高い。大寒の日に寒さがピークを迎え、その後、季節は徐々に春へと動くと考えられている。

中村暢夫
●
大寒や珈琲茶碗の厚いふち
【永田満徳評】
大寒の句はその景色を詠むか、その厳しい寒さと拮抗するものを詠むかが多い。掲句は「大寒」の寒さと「厚いふち」とを取合せた結果、二物衝撃に等しい句となって、取合せの醍醐味を味合わせてくれる。

【ながた・みつのり／俳人協会会員、熊本市】

方言を味わう㊷

球磨弁の接頭・接尾語②

――火の番――



前田一洋

地球温暖化とは申せ、この二月は「北極の月」である。氷雨が降った翌朝には、屋根の樋からたれす（つらら）が下がり、庭の日陰には霜柱がざっくざく。それでも元気な子供たちは、たれすをぽきんとツン折ってがりがりかじりながら凧揚げ、独楽回し、さんげ足（鷺足・竹馬）などに熱中するのであった。

ただ暦は時として季節を先取りすることもある。「節分・立春」がその好例。鬼は外福は内とぱらぱら豆撒きをすれば、何とはなしに身も心もほんわか弾んでくるから不思議。

「どら、おどん達も炬燵ィばかりヒッくじっとらじに、まいきゃにゃ田のぐるりどもさりィてみゅうかじゃら」「さいーば、火の番ばかりしとれば足のキャ腐るるかもしれん」「堂さんのにきのこうじ（小溝）にゃ、もう芹どもが生いとるかもしれんばい」「古（旧暦）の七草どもして、ウッたもろかじゃら」

麦踏みと寒ごい

かつての農家では稲の裏作として、小麦やはだか麦を栽培していた。晩秋に種を蒔き、麦秋と言ってながし（梅雨）前に収穫するのだ。ただその間に冬が来るので、霜柱がその根を持ち上げて成長を阻害する。このため北風に吹かれながらの作業、「麦踏み」が行われていた。まことに辛い仕事であった。

またやがて来る作物や成り木の成長期に備えて、堆肥や下肥を施していた。そのお陰で野菜類は厳しい寒気に耐えて太り、柿や栗などの樹木は美味い実を沢山実らせてくれた。

「日添い（日陰）の麦踏みすっ時どま、びんたはふー包みしとうたいどん。足指どまヒッ切れてオッ取るるごと冷たかったもんな」「あの時分ににゃ、軍手も靴下も無かったもんじゃって、その冷やさ寒さちゅうは哀れゴンパチじゃったたい」「そして霜焼けやら垢ぎれのイジ痒いかったことが」「今ないば焼酎なっとヒン飲うで寝っとじゃったいどん」

八日節句と針供養

裁縫はかつての女性たちの大きな仕事であり、布団から丹前さらには家族の着物まで殆んどが自家製であった。日常には、「まーたこぎゃ太うチー破ってじゃっがア」と云いながら、晩飯のあとから母親はせっせと衣類のふせ（つくろい）をしてくれるのであった。

そのために裁縫箱は大事な嫁入り道具であり、どんなに貧しい家庭でも必ず持たせてやっていた。そしてその中には針山、物差し、へら、糸巻きなどが仕舞ってあり、おなごにとってはまさに「宝の箱」でもあったのだ。

「おどんな学校の勉強は、そのよにでけはせんじゃったいどん、裁縫の成績やどろころ（まあまあ）良か方じゃったもん。そいもんじゃって八日節句の針供養の時にゃ、先生のおどんに一番に針よば豆腐にツン抜かせてくれおんないたとたい。もう今じゃ目もとろう（頼りなく）キャしなっとるいどん、おまいが足袋のふせどまでくっかもしれん、どら」

太郎朔日とゴッドン

「暦よば見てみたいば、きゅう（今日）はひゃ（早くも）古っ（旧暦）の二月一日じゃらよ。昔ゃたしか、太郎じーたちちゅうて言いおっないたぐたったな」「さいば、おどもが子供の時分ににゃ、この日にゃ山やら川にゃ決して行たちゃならん。ヤンかぶったびんた（頭）のし達の、ひょーひょー云うて通って行きやっ時ィ、ヒッ連れてはってきやっでちゅうてじゃろ」「そしてはら鎌やら鍬ば庭やら畑にナンぎゃっとけば、そんし達のオッ盗ってはってきやるちゅうてもじゃった」

これはまことに奇妙な年中行事で、その日にはほっ（祝人）どんから「ゴッドン（牛頭天王）」のお札を貰って来て、家の出入口や家畜小屋などに貼り付け、しらだご（米の粉団子）を作って供えていた。やんかぶったというのは、髪毛が伸び放題になった状態で、「ひょーひょー」は犬を呼んだり、お互いに合図をしあう時に発する裏声とも思われる。

【まえだ・かずひろ／人吉市】

千載列青史

春秋

頼山陽は、13歳の時、次の詩をつくった。

十有三春秋　（十三の春秋有り）
逝者已如水　（逝く者は已に水の如し）
天地無始終　（天地　始終なく）
人生有生死　（人生　生死あり）
安得類古人　（安んぞ古人が類するを得て）
千載列青史　（千載　青史に列せん）

「春秋」は年月、「千載」は千年（長い歴史）、「青史」は歴史（書）を指す。「逝者已如水」は「論語」子罕篇の「子在川上曰、逝者如斯夫、不舎昼夜」（子川上に在りて曰く、逝く者は斯くのごときかな、昼夜を舎ず）」の引用で、儒学者の子であるとしても、13歳で、このような詩をつくった、その能力に驚き、「立志」の言葉として、これ以上の言葉はないようにみえる。『論語』為政編に云う、

「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。
七十而従心所欲、不踰矩」

も同じである。「千載列青史」には、学者・思想家として歴史に名を残したいとの強い意思が含まれている。「十有五而志于学」も同様である。いまだに「惑い」つづけ、なにが「天命（天職）」かも皆目知らない己を恥じる。中学3年生時に「立志式」を実施する学校が多い。それを契機に、生徒たちには大志を抱いて欲しいと願う。

閑話休題

芥川龍之介「地獄変」の粗筋は周知のとおりで紹介するまでもない。「地獄変」の「変」は「変相図」の略で、「地獄変」は「地獄図」を指す。主人公の絵師良秀が、まぎれもなく、絵の天才であったことも確認するまでもないだろう。しかし彼の天才は、彼が「彼の地獄」にいるときに承認されるのであって、彼が絶望のうちに自死し、墓に入っても、その墓は雨風に曝されつづけ、最後には誰の墓であるかも忘れ去られる運命にある、良秀は、天才だが、彼には救いの道はない。彼は絵師になろうと志したのではない。有名になろうと希望したのでもなかろう。作画のため刻苦勉励したのではなかろう。絵を描くこと自体に喜びを感じていたに違いない。その好きな作画の力は「彼の地獄」のうちに花を咲かせ、彼を天才にした。芥川は、救済されることのない良秀に天才をみ地獄そのものをみたのであった。



頼山陽像（帆足杏雨筆 広瀬旭荘賛 京都大学総合博物館蔵）

閑話休題

孔子は志を立て、諸国をまわり、彼の理想を実現しようとした。しかし、彼を受け入れる領主はなく、彼は故郷に戻ることになる。その途上で、顔回、子路などを失い、涙のなかで彼は死んだ。志を立てもそれが実現するとは限らず、弟子を失うこともある。生あるうちに志が大成せず、この世を去ったのちに、志を継ぎ、その言葉を巻求める者がでてくるときもある。弟子たちを介した言葉が己の大志そのものである保証はない。意図したことが実現せず、その反対の結果に至ることを重ねつつ、人の交代はつづくのであろう。

谷口臣三郎のいう「悲惨の涙」は大志を抱きし者のみに許される涙にほかならず、その涙の意味を知ったとき、欲するままに生きても矩を越えないのであろう。

余人をもって代えがたし

久馬　凌

私はレバノンにいる

カルロス・ゴーンはすごい。最初、その報酬に驚いた。10年ほど前であろうか。そのとき報酬はすでに10億円あった。一部マスコミが高額すぎるのではないかと質問した。彼は、優秀な経営者を獲得するつもりなら、その程度の報酬を出すのは当たり前だ、少なすぎるぐらいだと反論したのであった。10億円で安い？　本当か？と思った。次に、逮捕されたときも驚いた。世界中の話題になった。なにか悪いことをしている気はしていたけど、犯罪に手を染めているとは予想もしなかった。じっさい、有価証券報告書を正確に記さなかったり、会社の金をお私的に流用する程度の「犯罪」であった。その程度の「犯罪」はたいていの経営トップはしている気がする。政治家もそうだろう。しかし、昨年末の「レバノンにいる」発言には仰天した。高額のお金を担保に保釈されていることは知っていたが、日本を脱出するとは予想もしなかった。連日、マスコミが脱出の手段を報道しているが、箱のなかに隠れたりしたらしい。保釈金は没収された。金額は10億円だったと記憶している。脱出は一人ではできない。助っ人を雇ったらしい。レバノン政府は身柄を日本に引き渡すつもりはないらしい。そのことを予想してレバノンに向かったようだ。ともあれ、ド派手な行動をしたもんだ。今後、どうなるのか予想できない。マスコミも、彼に飽きてきたのか、最近では新型コロナウイルスばかり報じている。



自白中心主義

逮捕されたからといって、その人物が犯罪者であるわけではない。犯罪者かどうかは裁判所が決める。そのことを十分に知っているのだけど、「逮捕」は重たい言葉で、「逮捕」には犯罪者のニュアンスがつきまとっている。多くの人も彼は脱出していったから有罪判決をうけただろうとおもっているのではないか。証拠がなければ無罪と推定されるという発想は日本では乏しい気がする。それだけでなく、逮捕して自白させる捜査方法をおかしいとおもっている人は少ない気がする。自白させて、その自白に基づいて証拠を集める自白中心的なやり方が日本の特徴だ。自白中心主義が誤判（冤罪事件）の最大要因であることはほとんどの人は知っている。同時に、「冤罪事件」はひどく稀であるともみている。自白を強制されて死刑判決を受けた受刑者がいる事実も知られている。それでも、自白中心主義は直ぐに変わりそうにない。

経営者の報酬

有価証券報告書の虚偽記載、特別背任の罪に問われているので、ゴーンの正確な収入・資産は分からない。彼とは無関係に、経営者の収入（報酬）を少し調べてみた、少なくとも、１００人以上の経営者が１億円以上の報酬のようだ、１億円は毎日１万円使っても１万日使える額だ。１万日といえば約30年である。とんでもない額である。「格差社会」が話題になるのも当然である。大いに話題になって欲しいと願っているけれども、格差縮小には向かっていないような気がする。むしろ、拡大しているように感じる。なんだか、身分社会になりつつあるようにもみえる。社会の富は社会全体で生み出している。平等に配分するのが筋であろう。「格差」をどうやって肯定するつもりなのだろう。経済学の教科書では、経営者の高額報酬を説明できない。しいていえば、「余人をもって代えがたい」ので、おのずから、高額になっていると説明するしかないが、「余人」が多すぎる。

【きゅうま・すぐる／八代市】

資料「平均寿命」

(1)世界の平均寿命

ＷＨＯ（世界保健機構）の調査によると、１９４加盟国の平均寿命は、

全体平均72・00歳
男性平均69・80歳
女性が　74・20歳

である。紛争地域や食料事情、医療体制の相違を変数にしない単純計算に基づく数値である。

(2)日本の平均寿命の歴史（いづれも厚生労働省統計）

①明治32年―36年（１８９９年―１９０３年）
男43・97歳
女44・85歳

②昭和25年（１９５０年）
男58・00歳
女61・50歳

③平成12年（２０００年）
男77・72歳
女84・60歳

④昨年（２０１９年）
男性81・25歳
女性87・32歳

男性は香港（87・06歳）、スイス（81・04歳）に次ぐ世界第三位で、女性は香港（87・56歳）に次ぐ世界第2位。ついでながら、平均寿命には、地域間格差がある。平均寿命の最も高い都道府県と最も低い都道府県との差は、男3・57年、女2・08年。東北各県の年齢が低いとされる。それとは別に大阪府大阪市西成区男性（73・10歳）のように平均寿命が特に低い地域がある。同地区の女性の平均寿命は83・30歳（下位4位）。

(3)「健康寿命」

２０００年に世界保健機構（ＷＨＯ）が提唱。平均寿命から日常的・継続的な医療・介護に依存して生きる期間を除いた期間を指す。日本ではSullivan法で計算。厚生労働省によると、

男72・40歳
女74・79歳

である。

（春秋）



くまがわ春秋歌壇

いもご短歌会

「いじめっ子世にはばかる」の諺もあり東の周に西のトランプ
年ごとに闇の深まる世にありてひるまずに立つ灯をかざす女性ら
※グレタ・詩織・衣塑子さんら
柳原　三男

脚痛み散歩の道もゆるゆると吾をなぐさむる菜の花の咲く
川縁に小舟が一隻ゆらゆらと釣り人もなく夕焼けせまる
坂本　ケイ

孫娘の結婚式に招かれて車椅子なれど京に向かいぬ
和服着て結婚式に参列すきりっと締まりて背筋伸びたり
上田　廸子

まともなる説明もなく逃げ回る首相を観ており日本の子らが
トランプの暗殺指令にモノ言えぬ日本の首相を世界が嗤う
上田　精一

復刻掲載

字図で見る球磨の地名 ㉟

上村重次

梢（コツレ）

―人吉市旧大村―

人吉市旧大村には梢地名が二件ある。一つは鬼木町字梢山（明治前期字名は梢）、もう一つは高野字梢原（コツレハル）で隣り合わせの小字である。現行字名はコズエヤマ、コズエハルであるが、本稿では明治前期字名の訓に従ってコツレにした。コズエをコヅエにしたのが訛ってコツレになったのであろう。

梢は日常使っている語で、意味もはっきりしているものの、地名で梢を用字する例は見当たらない。『大和地名辞典』には奈良県吉野郡十津川村湯川字コズエ渕東平が、また『日本地名索引』には広島県の木末（こずえ）があり、ともに人吉市の梢と同系の地名であろう。

『大言海』には「梢　こずゑ　木末（コズエ）の義①木の幹、又は枝の先。木の末（うれ）②年の暮、歳末」とある。地名の梢は前に述べた漆、瓜、嬉などと同じく境界の端末の表現であって浦（裏）に通じる語である。

このことは人吉市の梢山、梢原の字図を見れば明白である。この一帯は山江村山田との境界域になっていて、星ケ迫（ホシがサコ）、舟石（フナイシ）、油ケ谷（アブラガタニ）、境松（サカイマツ）など境界特有の小字が並んでいる。第一回「箕意之原」（本誌創刊号）で取り上げた山江村山田の蓑原とも近接していて、古くからのムラ境地であったことがわかる。

このように疑問点もなく、衆目一致する梢地名に挑戦するのは類例の少ないことの他に、梢には境界標の意味がある点を指摘したいからである。漢和字典で和語のコズエに当たる漢字を見ると、梶（ひ）、杪（ひょう）、梢（しょう）、標（ひょう）などが出ている。

梶は漢字の意味・コズエであるが、和訓でカヂとするのは舟の後尾で使う木、即ち尾・木の合字と見てのことだろうか。梶原、梶木など梶地名の多くは境界地にあるが、コズエとも関連があるのかもしれない。梶地名は別に取り上げる。

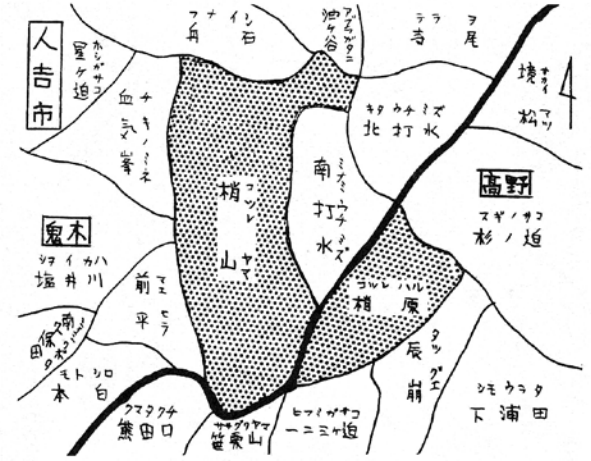
次に標は標本とか目標といった熟語になれているせいか〝しるし〟〝あらわす〟というような意味に限定しがちである。ところが漢和辞典には①コズエ（木末）②高い枝③端④しるし⑤はしら（柱）⑥マト（的）の順で、和語が書いてある。つまり標の第一義は梢である。

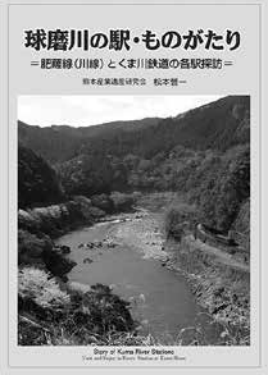
地名用語としての標は区域の締切、即ち境界の意である。標縄（しめ縄）、標野（しめの）などのシメがそれに当たる。

「梢は木の末で、土地区域の先端表現である」と回りくどく説明しなくても「梢は境界の標である」と端的に言ってよいわけである。山江村山田境に境界線の意である梢地名があるのは、一帯の境地に特別な意味があったのかもしれない。

【うえむら・しげじ／宇土市生まれ、元熊本日日新聞社記者】

【おことわり】本連載は平成6年から9年にかけて執筆されたものの復刻版で、合併前の町村名をそのまま使用しています。





本誌に連載された31駅が一冊に

球磨川の駅・ものがたり
＝くま川鉄道の各駅探訪＝
熊本産業遺産研究会 松本晉一

■A5判 212頁オールカラー
■定価 1,650円（税込）

ご購入は人吉・球磨の書店、TSUTAYA八代松江店、博多駅売店、くま川鉄道「くまたび」、道の駅さかもと、発行元の人吉中央出版社にどうぞ。

発行：人吉中央出版社 0966-23-3759

くまがわ学習塾 ㉜

問１　以下の括弧を埋めよ　（例：ドラゴン（トレイルラン））

① １月は睦月、２月は（　　）、３月は弥生、４月は卯月、５月は皐月、６月は（　　）という

②八代市は、旧八代市、旧坂本村、旧泉村、旧東陽村、旧（　　）、旧（　　）が合併してできた自治体である

③ 野球選手川上哲治は、熊本工業高校を卒業し、（　　）で活躍した。背番号は（　　）であった

④祖父、父などの後を継ぐ世襲議員が増えている。たとえば、小泉進次郎環境大臣、（　　）、（　　）、（　　）など

⑤夏目漱石は、『吾輩は猫である』、『虞美人草』、『草枕』、（　　）（　　）などの作品を書いた

問２　空白のマス目に適切な数字を入れて以下のナンプレ問題を完成させよ

（ナンプレ問題を知らない読者は、お孫さん、お子さんにやり方を教えてもらってください）

			9		8	1	3	
		8		5				
							4	
8		1		6	9			3
6			1		7			9
2			5	8		7		1
	8							
				2		5		
	3	6	8		1			

問３　以下の文章は正しいか、正しいときは〇を、誤っているときは×をつけよ

（例：「会計年度任用職員」は正規職員である。×）

① 昨年の全国の出生数は約 91 万人であった、

②肥薩線を走る観光列車「やませみかわせみ号」はダイヤ改定により減便される予定である。

③八代市、人吉市の新市庁舎は全額、国の補助金で建設される。

④熊本県知事の「被選挙権「は熊本県内に住所がある 18 歳以上の者が有する。

⑤消費税引き上げにともなうプレミアム・商品券は全世帯に毎年配布される。

⑥「新型コロナウイルス」は香港で発生した。

⑦元日産会長ゴーン被告人の国外出国は「逃亡罪」に該当する。

⑧熊本地震で不通になっていた豊肥線は今年秋には開通する予定である。

⑨総理大臣主催「桜を見る会」は廃止になった。

⑩政府の統計によると、人口の首都圏集中に歯止めがかかった。

⑪「道の駅」はすべての市町村にある。

⑫イギリスは EU の一員である。

⑬西郷隆盛は靖国神社に祀られている。

⑭ NHK 大河ドラマ「麒麟が来る」の主人公は徳川家康である。

⑮漱石『三四郎』は福岡県出身である

問４　「ネズミ」に関する諺・小話を書け　（例：「ネズミの会議」）

①（

②（

③（

④（

⑤（

⑥（

⑦（

⑧（

⑨（

⑩（

※答え合わせは次号でおこないます

ひろしの…
げっかん・ぎひょう



―IR 汚職事件、秋元議員のほかにも 5 人―

中国のカジノ事業者日本法人を東京地検特捜部が捜索。地元の反対も多い中、安倍政権が後押し。人吉での場外車券売場設置も反対の声が多い。

外来語から学ぶ英単語（47）…… 藤原　宏

フィット・フィッター・フィッティング・フィッティド・フィットネス
fit　itter　fitting　fitted　fitness

「**fit**（フィット）、適合する」の類義語に前回取り上げた **suit**（スーツ）があります。**fit** が大きさや形状など物理的な条件に適合する意であるのに対し、**suit** は特定の要求や必要性に適合する意で使います。

"**These shoes fit her nicely.**"　（この靴は彼女にぴったり合う）

"**The red shoes suit her well.**"　（その赤い靴は彼女によく似合う）

fitter（フィッター）は「**fit** する（させる）人」の意で、「家具などの取り付け人・機械などの組み立て工・仮縫いなどの着付け人」のことです。

fitting（フィッティング）は「**fit** すること・**fit** されたもの」の意の動名詞形で、「取り付け・作り付け家具・仮縫いのための着付け」などを意味します。服飾品店の試着室は「**fitting room**」といいます。

fitted（フィッティド）は「形に合わせられた」意の過去分詞形で、「**a fitted coat**」は「体型にぴったり合ったコート」のことです。

fitness（フィットネス）は生活のあらゆる場面に適応できる体力・筋力・持久力など総合的な健康状態のことです。

(414)

インフォメーション

【開催中】

▽「人吉球磨は、ひなまつり」（～3月22日、郡市一帯）

▽川上哲治生誕100年記念展「今甦る郷土の偉人」（～11月1日、人吉クラフトパーク石野公園展示室）

2月15日（土）

▽第26回人吉ふれあい100円商店街（人吉市中心市街地）

▽城下町「やつしろ」のお雛祭り／ひなぐ雛祭り（～3月8日、八代市本町一帯／日奈久温泉）

2月16日（日）

▽第17回ひとよし温泉春風マラソン（メイン会場：ふるさと歴史の広場）

2月18日（火）

▽人吉場外車券売場を考える講演会「ギャンブル依存症」とは」（中小企業大学校人吉校）

2月22日（土）

▽球磨湿地研究会「湿地保全報告会」（相良村松葉公民館）

2月23日（日）

▽第46回人吉梅まつり（人吉市大畑梅園）

2月29日（土）

▽▽田舎の体験交流館さんがうら「花づくり講習会」（球磨村さんがうら）

TAKEDA Eye Clinic
たけだ眼科クリニック
院　長 竹田 憲司
人吉市南泉田町39　☎23-3096
めがね・コンタクトレンズの
アイ ウェア槙（まき）
（たけだ眼科ビル内）☎0966-23-3097
デイサービスセンター
ケアプラン作成所いずみ
（居宅介護支援事業所）
いずみ
協力医療機関 たけだ眼科クリニック
人吉市南泉田町70番地の3 ☎0966-28-3307

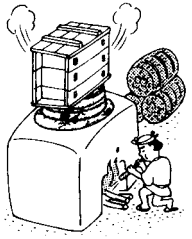
編集後記

昨年は本誌の関係者との別れが多かったため、今月は二つの追悼特集を組んだ。長い間「肥後狂句」でお世話になった村上和男さん（14頁）と、昨年の12月号に引き続き瀬戸致行先生（6頁）を偲んだ。★岐部明廣さんの「住みたい田舎ランキング」（38頁）は、自分たちの暮らしている場所がどの位置にあるのか気になるランキングだ。今後の展開が気になる。★本誌43号で紹介した前山光則さんの『ていねいに生きて行くんだ』（弦書房）が、第61回熊日文学賞を受賞した。「これまでの文学的な蓄積を表現しており、人間肯定の文学といえる」との評価があり、流域の明るい話題の一つである。★感染が広がっている新型コロナウイルスは中国だけでなく世界中で確認されている。風邪や季節性インフルエンザなどの一般的な感染症予防のためにも、咳エチケットや手洗いなどを徹底しなければならないようだが、マスクの品不足は人吉にまで及んでいる。早く収束することを祈るばかりである。（ま）

〒868―0015
熊本県人吉市下城本町1436―4の3号
人吉中央出版社「くまがわ春秋」編集部
info@hitoyoshi.co.jp
電話・ファックス 0966・23・3759



本誌の取扱店舗
■清藤書店■ブックスミスミ■明屋書店（錦店・免田店・多良木駅店）
■道の駅さかもと■ TSUTAYA 八代松江店

匠の技

御膳醤油
（だし入り万能しょうゆ）

・玉子かけご飯
・豆腐
・お刺身に
300ml 650円（税抜）

◆みそ煎餅
477円（税抜）

◆納豆みそ
477円（税抜）
◆納豆みそ
（お徳用）
300円（税抜）

人吉散策コース 九州相良 蔵めぐり
みそ・しょうゆ蔵

資会社 マルカマ
釜田醸造所
会長 釜田元嘉
社長 釜田顕
〒868-0001 熊本県人吉市鍛冶屋町16
電話（0966）22−3164
FAX（0966）22−3165
メール info@marukama.co.jp